The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国語における他動性 : プロトタイプ理論から見たカテゴリーの内部構造と非規範的構文
Author(s)	鄭, 聖汝
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2010, 50, p. 91-152
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3573
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

韓国語における他動性
―プロトタイプ理論から見たカテゴリーの内部構造と非規範的構文―

鄭　　聖　汝

要旨

本稿の目的は概ね次の三点である。（ⅰ）プロトタイプ理論に基づく他動性の記述枠組みを提案する。（ⅱ）韓国語の他動性をこの枠組みを用いてその全体像を記述し, この枠組みの有効性を示す。最終的に,（ⅲ）他動性の多様なカテゴリーの内部構造を明らかにし, 特に非規範的構文の成立を動機付けている述語タイプ（またはスキーマ）を特定することを目指す。

本稿では, 従来のように個々の他動詞節・自動詞節を考察の対象とするのではなく, むしろロッシュらが行ったような名詞類のカテゴリー化とパラレルな関係での, 家族的類似性の概念を基盤にしたプロトタイプ観を導入する。即ち, 基本レベルのカテゴリーを認め, その上位カテゴリーとして MAKE, CAUSE, GIVE/GET, HAVE, ACT/ACT ON, MOVE, BECOME, BE などの述語タイプを導入し（cf. Pulman 1983 , Taylor 2003）, それぞれのスキーマを提案する。

本稿のアプローチから, 韓国語の非規範的他動詞構文（非意図的事象の他動詞構文, 無生物主語の他動詞構文, 同族目的語構文, 軽動詞構文 , 二重対格構文など）の成立には, 主として MAKE スキーマと HAVE スキーマの二種類が関与することが明らかになる。

キーワード：他動性, プロトタイプ理論, カテゴリー, 内部構造, 述語タイプ, スキーマ, 非規範的構文, 記述枠組み , 韓国語

1. はじめに

ロッシュらの一連の研究によるプロトタイプ理論は, ＜色彩語＞・＜鳥＞のような自然物や＜家具＞・＜乗り物＞のような人工物のカテゴリー化から始まり , それだけにとどまらず後に名詞類以外にも応用されることになった。動詞の自他といった文法カテゴリーにまでこの考え方が適用されると , Lakoff（1977）, Hopper and Thompson（1980）（以下 , H & TH と略す）,

ヤコブセン（1989）が行ったような他動性に関するプロトタイプが提案されることになる。即ち, 他動性の問題は, 伝統的研究でよく見受けられる――必要かつ十分条件によって定義され, その内部構造は均質であり, その境界も明確に二分できるものとして捉えられる――古典的カテゴリー観に基づくものではないと考えられるようになった[1)]。その代わりに, 動詞のカテゴリーは, 最も他動詞らしい他動詞, あるいは最も自動詞らしい自動詞といった典型事例（プロトタイプ）とその周辺事例からなる連続体として捉えられ, その内部構造は不均質かつ程度の差があり, その境界も不明確なものとして扱われるようになる。

Lakoff（1977: 243-245）やH & TH（1980）に従えば[2)], 典型的な「他動的状況」とは, Goldberg（1995）の指摘のように, その中心的意味が「意志性をもつ動作主が無生物の被動作主に影響を与えるもの」, つまり「使役的事態」がその具体的なものとなる（河上他訳2001: 155参照）[3)]。一方, ヤコブセン（1989）やTsunoda（1999）に従えば, 典型的な「自動的状況」とは, その中心的意味が「対象物のみ関与する事態において, それが状態変化を被るもの」, つまり「自発的事態」がその具体的なものとなる。そして, これらのプロトタイプからの拡張によって, 広範囲にわたる他動的表現・自動的表現が認可され, 程度差のある連続スペクトルがカテゴリーの内部で形成されるものとして捉えられている。

しかし, 本稿ではLakoff（1977）やH & TH（1980）の提案に基づいて進められてきた他動性のプロトタイプを直接的に援用する形はとらず, Rosch and Mervis（1975）が提案したような名詞類のカテゴリー化とパラレルな関係での, 家族的類似性を基盤にした他動性のプロトタイプを考えたい。その具体的な考えは第2節で述べる。

---

1) 韓国語学の分野において古典的カテゴリー観を前面に押し出している代表的研究には, 崔（1994 [1929]: 255-259）と野間（2007: 500）がある。そこでは, 自動詞・他動詞のカテゴリーが, 一つの形式的な基準, 即ち *-ul/lul*（を）格を伴っているかそうでないかによって明確に区別される。その点において, 洪（1988）, 禹（1996）, 韓（2000）などによる自他研究も基本的にはそれほど変わらない。

2) H & TH（1980）では, 他動性の高低（high or low）を測ることができる10個の意味要素が提案されている。参加者の数（participant）, 力動性（kinesis）, 限界性（aspect）, 瞬間性（punctuality）, 意志性（volitionality）, 肯定（affirmation）, 様式（mode）, 動作主性（agency）, 対象物への影響力（affectedness of object）, 対象物の個別性（individuation of object）がそれである。

3) ただし, 典型事例の例示には研究者による相違が見られる。Taylor（2003: 231）は *kill*, *kick*, *shoot* のような他動詞を典型例と見なし, Lakkoff（1977: 244）においても *hit* を典型例の中に入れている。一方ヤコブセン（1989: 216-217）や角田（1991: 81-86）は「壊す」「殺す」「送る」のような状態変化他動詞が最もふさわしい典型例と判断する。特に角田では, *hit*, *kick* のような動詞は典型的な他動詞ではなく, 状態変化を引き起こさない点で *kill* より他動性が低いと見なされている（角田1991: 73）。さらに, 角田は, 状態変化他動詞（つまり典型例とされる特定の語彙）を基準に他動性を捉えなおした結果,「意志性」は他動詞と自動詞の区別に無関係であると主張し, 他の研究者と大きく異なる見解を示した。

本稿の目的は, 概ね次の三点である。（ｉ）ロッシュらによるプロトタイプ理論に基づいて 他動性の記述枠組みを提案する。（ii）この記述枠組みで, 韓国語における他動性の全体像を記述し, この枠組みの有効性を示す。最終的には,（iii）カテゴリーの内部構造を明らかにし, 非規範的構文の成立に関与する述語タイプ（またはスキーマ）を特定することを目指す。よって, 本稿では, カテゴリーの周辺的存在である非典型的な自動詞節・他動詞節にも目を配り, それぞれがどのような述語タイプ（またはスキーマ）に動機付けられて（あるいは基づいて）拡張しているのか, という観点からも考察を行う。

本稿が, Lakoff（1977）や H & TH（1980）, ヤコブセン（1989）および, その他の多くの他動性研究（最近では, Næss 2007 , 角田・佐々木・塩谷2007など）と異なる分析手法をとる理由は, 抽象的な意味要素（注2参照）を頼りに量的（less or more）に他動性を測り, その高低を連続的スケールの上に単に位置付けることよりも, むしろ当該の事象が言語的に他動詞節または自動詞節にコード化される際の, 具体的な認知基盤を突き止めることに関心があるからに他ならない。その認知基盤は, 第2節で定義する述語タイプとそのスキーマに求めることになる。

以下, 第2節では, 動詞のカテゴリー化を議論し, 本稿で提案する記述枠組みを導入する。第3節では, 述語タイプと文構造の結びつきにおいて規範的なパターンを示す自動詞文・他動詞文を取り上げる。第4節では, 非規範的なパターンを示す構文――非意図的事象の他動詞構文, 無生物主語の他動詞構文, 同族目的語構文・軽動詞構文, 与格－主格構文・二重主格構文・二重対格構文, 脱焦点化された動作主を含意する自動詞構文と他動詞構文（介在構文）――を見ていく。第5節では結論を述べる。

2.　記述枠組みの導入

2.1　動詞のカテゴリー：述語タイプとスキーマ

サルトルは, 著書『存在と無Ⅲ : 第四部』の中で人間存在の基本的なカテゴリーについて哲学的な洞察を行い, 次のような見解を記している。

（1）「持つ」「為す」[4]「ある」は, 人間存在の基本的なカテゴリーである。**人間のあらゆるいとなみは, この三つのいずれかに包摂される。**例えば,「知る」〔認識する〕は,「持つ」

4）松浪（1960: 11 [507], 第四部）の訳註によれば,「為す」に当たるフランス語の faire には, 英語の make と do, ドイツ語の machen と tun, 日本語訳では「作る」と「為す」との両者が一つに含まれている。実は韓国語にも , フランス語のように *hata* ‘する’ が *cista* ‘作る’ と結びつき , 両者が交替可能な場合がある。本稿の3.1節と4.3節を見られたい。

の一つの様相である。それらの三つのカテゴリーは, たがいに結びつきなしに存在するのではない（松浪訳1960: 11 [507]）。（太字の強調は筆者）

一方, 言語学の分野では, Pulman（1983: 107-108）がロッシュやバーリンらの研究に触発され, 動詞類と名詞類が同等な関係をもつタクソノミー的階層構造を仮定し, 図2のような動詞のカテゴリーを提案している。ここでは名詞とのパラレルな対応関係を一目瞭然に示すため, Taylor（2003: 49-50）が描き直したものを掲載する（図1と図2は, 辻1996: 55から掲載）。

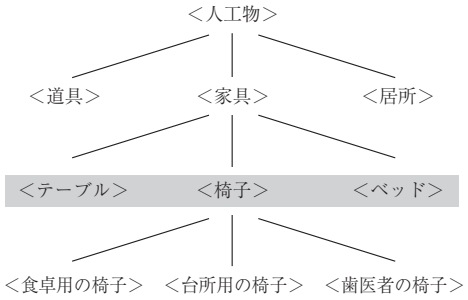

図1　カテゴリー化の二つの軸（名詞のカテゴリー）

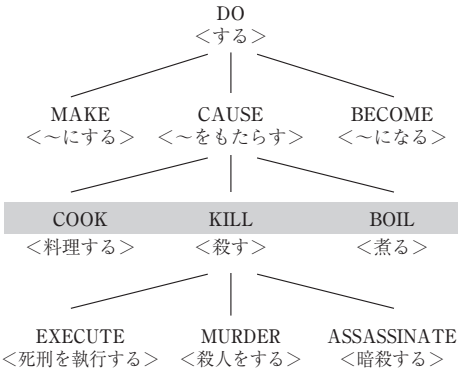

図2　カテゴリー化の二つの軸（動詞のカテゴリー）

即ち, Pulman（1983）は, 動詞のカテゴリーをすべて包摂する最上位語（unique beginner）にはDOとBEが考えられるが, この二つをさらに一つに統合する最も最上位の単一語はおそらく（英語には）ないだろう, という見解を示している（この点はLyons 1977: 298も同じである）。そして, 最上位語のDOの下位カテゴリーに属するものとして, *cause, make, become, act, move, say* のような動詞を挙げ, これらを原始要素の動詞（primitive verbs）と呼び[5], 名詞の階層構造の「生活形」（Life form）レベルに対応させている（Pulman 1983: 108参照）。また, 図2に見られるように, CAUSEの下位レベルには属または基本的レベル（Generic or basic object level）の動詞 *kill* が属し, さらにその下位レベルには *murder, execute, assassinate* のような特種（specific）レベルの動詞を設けている。

Pulmanのアイデアをより明確にし, さらに基本レベルカテゴリー（basic level category）の

5) Pulman（1983: 108）によれば, これはDixon（1971）の ‘nuclear verbs’ とも比較されるものであり, Austin（1961）にも類似の概念が見られるという。

考え方を前面に押し出して示したのが, Taylor（2003）が描いた図1と図2である（網掛けの強調は筆者）。名詞の基本レベル語の＜テーブル＞, ＜椅子＞, ＜ベッド＞と同じ階層に, 動詞の基本レベル語の COOK, KILL, BOIL を対応させ, またその上位レベルの＜家具＞と同じ階層には CAUSE, MAKE などの原始要素の動詞を対応させていることが見て取れる。

Lyons（1977: 295 , 298）にも, 基本レベル語を認めるプロトタイプ・カテゴリー観ではないが, 動詞語彙の階層構造に関する興味深い洞察が見られる。まとめると, 次のように整理できる。

（2）**「動詞のカテゴリー」に対する考え方**

サルトル：（ｉ）人間のあらゆる営みは,「持つ」「為す」「ある」の三つのいずれかに包摂される。

（ii）これらの三つのカテゴリーは互いに結びつきがある。

Pulman:（ｉ）最上位語（unique beginner）には, DO と BE がある。この二つを一つに統合する最も最上位語（単一語）は, 英語には存在しない。

（ii）DO の下位カテゴリーには, *cause, make, become, act, move, say* のような原始要素の動詞が属する。

（iii）CAUSE の下位カテゴリーには, *kill* のような属または基本的レベル（Generic or basic object level）の動詞が含まれる。

Taylor:（ｉ）*kill, cook, boil* は基本レベル語である。

（ii）*kill* の上位語は CAUSE であり, さらにその上位語は DO である。

Lyons:（ｉ）自動詞と他動詞のすべての最上位に立つような最も一般的な動詞は, 英語には存在しない。

（ii）一般動詞（generic verbs）には, *act, move, become, make, get, be* のような動詞がある。

（iii）*get* には *buy, steal, borrow, win, earn, catch, find, grasp* などの動詞が包摂される。

本稿では, Pulman や Taylor の考え方を発展させ[6], 以下の提案を行う。ただし, 彼らが原始要素の動詞（さらに Lyons では一般動詞）と呼んでいた MAKE, CAUSE, BECOME などをここでは「述語タイプ」(predicate type）と呼び, 基本レベル動詞より一段上の上位語, 即ち具体

6）ただし Pulman（1983: 第5章）は, 基本レベル語より下位レベルの動詞に関心があり, 特にそのプロトタイプの特定に焦点を当てている。例えば, *killing* のより良い事例は *murder* であり, *kill* の下位カテゴリーの成員の中では *execute* より *murder* がプロトタイプであるとされる。

的な事象を表さない, 抽象的なカテゴリーとして位置付ける。

（3）は, 本稿で仮定する述語タイプの種類である。（4）はそれぞれの述語タイプの理想化されたスキーマ（schema）を示したものである。このスキーマは, 抽象性の高い概念的スキーマというよりも, 基本レベル語が指し示す具体的な状況をもとに, それを繰り返し経験することによって（Langacker 2000の「用法基盤モデル」参照）, それらの状況（事態）を手続き的にパターン化した「手続き的スキーマ」として導入する。（4）のスキーマの“—”は, まとまりある一連の連続する事態が時間順に繋がるもの、即ち、時系列上のポイントにある事態の別の局面への移行を表す。（現実には重なり合う部分も生じる。）括弧の中の“⇒”は, 前段階（左側）の事態を経て, BECOME, BE, HAVE のような状態が, その結果, 存在する（生じる）ことを表す。いわば「履歴付き」であることを表す標識である。$BECOME_{1/2}$は, 可能な先行状況として$BECOME_1$と$BECOME_2$があり, そのいずれであってもよいことを表す。

（3）**述語タイプの種類**

MAKE, CAUSE, GIVE/GET, ACT/ACT ON, MOVE, BECOME, BE, HAVE

（4）**述語タイプ**	**スキーマ**
MAKE タイプ	$MAKE_1$: ACT ON *x, m* — BECOME *y* — BE *y, z* — HAVE *x, y*
	（創作物の作成$_1$: 創作物が創作者に帰属する場合）
	$MAKE_2$: ACT ON *x, m* — BECOME *y* — BE *y, z*
	（創作物の作成$_2$: 創作物が創作者に帰属しない場合）
CAUSE タイプ	$CAUSE_1$: ACT ON *x, y* — BECOME *y* — BE *y, z*
	（対象物の状態変化）
	$CAUSE_2$: ACT ON *x, y* — MOVE *y, z* — BE *y, z*
	（対象物の位置変化）
GIVE/GET タイプ	GIVE : HAVE *x, y* — ACT ON *x, y* — MOVE *y, z* — BE *y, z* — HAVE *z, y* （能動的な所有物移動 : 第一動作主＝主語）
	GET_1 : HAVE *x, y* — ACT ON *z, y* — MOVE *y, z* — BE *y, z* — HAVE *z, y* （能動的な所有物移動 : 第一動作主＝主語）
	GET_2 : HAVE *x, y* — ACT ON *x, y* — MOVE *y, z* — BE *y, z* — HAVE *z, y* （=recieve）
	（受動的な所有物移動 : 第一動作主≠主語）
ACT/ACT ON タイプ	ACT : ACT *x* （身体を使った活動。例 : 笑う）

	ACT ON$_1$: ACT ON *x, y*	（*x*≠*y* : 活動・接触・打撃）
	ACT ON$_2$:ACT ON *x, x'*	（*x* > *x'*: 身体を使った活動。例 : 手を振る）
MOVE タイプ	MOVE$_1$: MOVE *x, z*（— BE *x, z*）	（動作主の移動）
	MOVE$_2$: MOVE *y, z*（— BE *y, z*）	（自然物の自発的な移動。例 : 雲）
	MOVE$_3$:（ACT ON *x, y*/*z, y* ⇒）MOVE *y, z*（— BE *y, z*）	（受動的な対象物の移動 : 位置変化と所有物移動）
BECOME タイプ	BECOME$_1$:（BE *m* —）BECOME *y*（— BE *y, z*）	（自然発生による自然物の生成・出現）
	BECOME$_2$:（MAKE *x, y* ⇒）BECOME *y*（— BE *y, z*）	（創作活動による人工物の生成・出現）
	BECOME$_3$:（CAUSE$_1$: ACT ON *x, y* ⇒）BECOME *y*（— BE *y, z*）	（対象物の状態変化）
BE タイプ	BE$_1$:（BECOME$_1$ *y* ⇒）BE *y, z*	（自発的な生成・出現による存在）
	BE$_2$:（MAKE *x, y* ⇒）BE *y, z*	（創作による結果物の存在 / 帰属）
	BE$_3$:（GET$_1$ *z, y* ⇒）BE *y, z*	（能動的な所有物移動による存在 / 帰属）
	BE$_4$:（GET$_2$ *z, y* ⇒）BE *y, z*	（受動的な所有物移動による存在 / 帰属）
	BE$_5$:（BECOME$_{1/2}$ *y* ⇒）（GET$_2$ *y, y'* ⇒）BE *y', y*	（自己生成的帰属）
	BE$_6$:（MOVE$_1$ *x, z* ⇒）BE *x, z*	（動作主の移動結果による存在）
	BE$_7$:（MOVE$_2$ *y, z* ⇒）BE *y, z*	（自然物の移動結果による存在）
	BE$_8$:（CAUSE$_1$ ⇒）BE *y, z*	（状態変化を被った対象物の存在）
	BE$_9$:（CAUSE$_2$ ⇒）BE *y, z*	（位置変化を被った対象物の存在）
HAVE タイプ	HAVE$_1$:（MAKE$_1$ *x, y* ⇒）HAVE *x, y*	（創作者所有）
	HAVE$_2$:（GET$_1$ *z, y* ⇒）HAVE *z, y*	（能動的所有）
	HAVE$_3$:（GET$_2$ *z, y* ⇒）HAVE *z, y*	（受動的所有）
	HAVE$_4$:（BECOME$_{1/2}$ *y* ⇒）（GET$_2$ *y, y'* ⇒）HAVE *y, y'*	（受動的な自己所有 : 誕生）

なお, 上記のスキーマに書かれた記述用語の言語的記述は, 以下のとおりである。

（5）ACT *x* :　*x* が何かをする。

ACT ON *x, m* :　*x* が *m* をもって何かをする。ただし, *m* は材料となる物質（material）。

ACT ON *x, y* :　*x* が *y* をもって何かをする。または, *y* に対して何かをする。

ACT ON *z, y* :　*z* が *y* をもって何かをする。または, *y* に対して何かをする。

ACT ON *x, x'*:	*x* が *x'* をもって何かをする。 ただし, *x'* は *x* に帰属する身体（部分）, またはその延長のもの
BECOME *y* :	*y*（の変化）が（目の前に）現れる。
BE *m* :	*m* が存在する。
BE *y, y'*	*y'* が *y* に帰属する。ただし, *y'* は *y* に帰属する身体部分, またはその延長の親族関係（誕生によって初めてその関係が発生するもの）
BE *y, z* :	*y* が *z* に存在する。または, *y* が *z* に帰属する。 ただし, *z* は物理的場所, 抽象的場所（認識的空間, 抽象的な状態など）
BE *x, z* :	*x* が *z* に存在する。または, *x* が *z* に帰属する。
MOVE *x, z*	*x* が *z* に移動する。
MOVE *y, z*	*y* が *z* に移動する。
HAVE *x, y*	*x* が *y* をもっている。
HAVE *z, y*	*z* が *y* をもっている。
HAVE *y, y'*	*y* が *y'* をもっている。
MAKE *x, y*	*x* が *y* を作る。
GET *z, y*	*z* が *y* をゲットする。
GET *y, y'*	*y* が *y'* を（受動的に）ゲットする。ただし, *y'* は *y* に帰属する身体部分, またはその延長の親族関係（誕生によって初めてその関係が発生するもの）

2.2 存在物の成り立ちと基本的スキーマ

上記の提案で最も特徴的なところは, BE タイプと HAVE タイプのすべて, そして BECOME タイプと MOVE タイプの一部が, それぞれの存在物の成り立ちにおいて何らかの起源をもっていることである。即ち,「履歴付き」のものとして捉えられる点である（注9参照）。

この記述枠組みを用いると, 例えば「私は家を二軒もっている」（HAVE 構文）と「私には二軒の家がある」（BE 構文）は, 両者とも所有物の「家」に対する解釈において, 次の三つの可能性（スキーマ）の中のいずれかの解釈を受けることが自ずと予測される。（ｉ）（$MAKE_1$ ⇒）$HAVE_1/BE_2$: 所有物の家は私が建てたもの, （ii）（GET_1 ⇒）$HAVE_2/BE_3$: 所有物の家は私が（能動的に）購入したもの, （iii）（GET_2 ⇒）$HAVE_3/BE_4$: 所有物の家は私が親から遺産相続などで（受動的に）もらったもの, である[7]。

---

7) 前述の文で, 以前私が訪ねたことのある家だとか, 私が以前写真撮影をしたことのある家だなどのように, 所有に至るその起源が HAVE スキーマと直接的な繋がりをもたない場合には,「私は, 以前私が訪ねたことのある家を二軒（購入して）もっている」のように, より有標的な表現が産出されること

$HAVE_4/BE_5$ ならば, 譲渡不可能な所有関係の「彼女は長い足をもっている」(HAVE 構文) や「彼女は足が長い」(BE 構文) のように, 典型的には「もって生まれた」属性が所有の対象となる場合の表現が対象となる。この「誕生モデル」を導入すると, 英語の *John has three daughters.* や日本語の「山田さんには娘が三人いる」のように, 誕生と共に親族関係が発生する場合も, $HAVE_4$ と BE_5 の例（またはその拡張）として扱うことができる。つまり, 親族関係も抽象的な所有概念において, 譲渡不可能なわけである。一方,「この人形はきれいな鼻を持っている」(HAVE 構文) や「この人形は鼻がきれいだ」(BE 構文) のような人工物の場合は, MAKE を経て人形が誕生することになるので, ($MAKE_1 \Rightarrow$) $HAVE_1/BE_2$ を経てから「誕生モデル」の $HAVE_4/BE_5$ に結び付くものと分析される。

このようなアプローチによると, 受動的所有を表す場合の $HAVE_3$ と $HAVE_4$ は周辺的な他動詞文を形成する述語タイプと予想される[8]。また, 個別言語ではこの述語タイプ（またはスキーマ）がどの構文パターンと結びつくかも追究できるだろう。

上記の提案のもう一つ重要な特徴は, MAKE タイプと CAUSE タイプの相違点を明らかに示している点である。この二つは,「存在物の成り立ち」に関して最大のコントラストをなす[9]。即ち前者は, 創作活動の結果, 生じる新しい人工物（創作物）の生成・出現を捉えているが, 後者はすでに存在している対象物（既存在の物）に対して働きかけた結果, 生じる状態変化を捉えるものである。従って, 我々が普段目にする存在物とは, 図3に示されている矢印の過程をすでに経ているものである。つまり, 自然物は $BECOME_1$（あるいは神の創造による $BECOME_2$）のスキーマによって, 一方人工物は MAKE スキーマによって理解される。これを「存在物の基本的スキーマ」と呼ぶ。この基本的スキーマは, あまりにも当然のものとして受け入れられているため, 改めて取り上げる必要性もないが, 以下の分析では, この区別が文の意味解釈のみならず, 文構造の産出（言語化）の際にも重要なファクターとして働くことが判明する（4.5節参照）。

になるだろう。また, そのような文を適切に理解するためには, 括弧で示したような, HAVE スキーマを適切に喚起させうる直接的な表現も同時に要求されることになろう。

8) Taylor（2003: 239）は, 他動詞構文の最も周辺的な事例の一つとして, *This tent sleeps six.*（このテントは6人用である）や *This room seats 500*（この部屋は500人受容できる）のような無生物主語の例を挙げている。本稿の立場から見ると, 人工物のテントと部屋はその成り立ちにおいて, まず MAKE スキーマが関与する。すると, これらの文は, それぐらいの人数が受容できるように製作され, そのため, そのような人数が受容できる能力をもっている（HAVE), という意味を含意すると分析できる。

9) 念のためだが, ここでいう「存在物の成り立ち」は手続き的スキーマに依存したものである。アイデア的には,「存在物」は Pustejovsky（1995）のクオリア構造の「形式役割」(Formal role) に,「成り立ち」は「主体役割」(Agentive role) に似ているといえるが, 必ずしも同質のものではない。

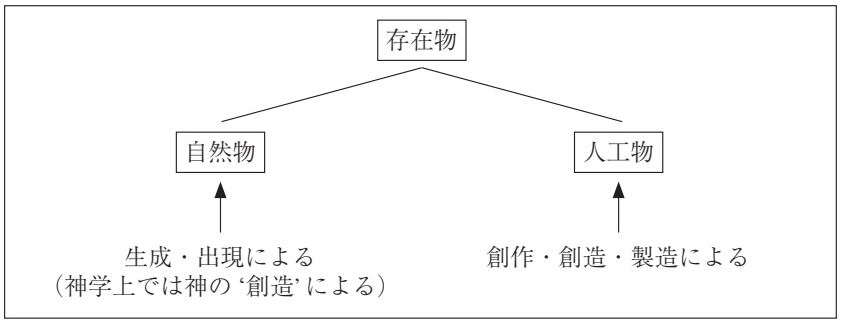

図 3　存在に至る経緯や成り立ちを反映した「存在物の基本的スキーマ」

以下では, 2.1節で提案した記述枠組みを用いて, 韓国語における他動性の全体像を記述・分析する。とりわけ, 韓国語では上記の述語タイプが互いにどのように結びつき, 内部構造を形成しているか, 非規範的構文はどのようなスキーマに基づき, それぞれ成立しているか, これらの点に注目して分析を行う。

3.　規範的構文と述語タイプ

この節で取り上げる個々の動詞（基本レベル語）は, 当然ながらその用法においては横の広がりが予想される。しかし, ここではその典型的な用法を中心に, これらの動詞の上位カテゴリーの述語タイプとその構文パターンとの結びつきを見ていく。本節では, 特にこの両者間の結びつきが規範的な構文を取り上げるが, それを記述する際にところどころで顔を出してくる非規範的構文の存在については, 関連箇所を確認する程度にとどめ, その全体的な記述は, 第4節にゆずる。

3.1　MAKE タイプと $BECOME_1$ /$BECOME_2$ タイプ

まず,「我々が知覚する世界」を想定しよう。そこでは, 絶えず何か新しいものが生成・出現したり, 消滅したりする。また我々は, 絶えず何か新しいものを作ったりもする。私達の周りにはこうして現れてくる様々な存在物で溢れている。このような知覚世界において生成・出現してくる存在物は, 明らかに図3で示した基本的スキーマを越えており, 自然物（自然現象）だけでなく, 実は人工物もその中に含まれることがわかる。例えば, 砂漠の中に新しいビルが出現したり, 任天堂の新ゲーム機が発明され世の中に出現したりするのは, 明らかに創作活動の結果, 我々の目の前に現れてくるはずである。

本節では, 創作物の作成を表す MAKE と, 自然現象における自然物の生成・出現を表す

$BECOME_1$および人工物の生成・出現を表す$BECOME_2$を取り上げ（この二つのBECOMEの関係については4.5節参照），それぞれの述語タイプに属する動詞とそれに対応する構文パターンを記述する。

まず，MAKEタイプを見てみよう。MAKEに属する動詞とその構文パターンは次のようである。これらの動詞の中で最も生産性が高いのは*cista*と*mantulta*であるが，両者の中では，*mantulta*のほうがより使用範囲が広い（洪2001: 373）。

（6）MAKEに属する動詞 : *cista, mantulta, picta, ssuta, kulita, ccata, seywuta, etc*

構文パターン :	（i）NP_1-NOM	（NP_2–INS）	NP_3-ACC	V*t*
	（ii）NP_1–NOM	NP_2-ACC	NP_3–INS	V*t*

（7）*cista* ‘作る’ ‘建てる’ ‘仕立てる’ ‘著述する’ ‘調剤する’

cip-ul cista/ saycip-ul cista/ ***pap-ul cista****/ si-lul cista/ sosel-ul cista/ chayk-ul cista/ yangpok-ul cista/ kamkiyak-ul cista/ ilum-ul cista/ yel-ul cista/ ccak-ul cista/ nongsa-lul cista/* ***ssalnongsa-lul cista****/ coy-lul cista/* ***mamwuli-lul cista****/ kyellon-ul cista.*

家を建てる / 巣を作る / **ご飯を作る（炊く，こしらえる）** / 詩を作る / 小説を作る / 本を著述する / 洋服を仕立てる / 風邪薬を調剤する / 名前を付ける / 列を作る / ペアを組む / 農作物を栽培する / **米作りをする** / 罪を犯す / **締めくくりをつける** / 結論をつける

（8）*mantulta* ‘作る’ ‘製造する’ ‘製作する’ ‘制定する’

thokkicang-ul mantulta/ ppang-ul mantulta/ cwuk-ul mantulta/ kulus-ul mantulta/ songpyen-ul mantulta/ mantwu-lul mantulta/ swul-ul mantulta/ cakphwum-ul mantulta/ yenghwa-lul mantulta/ chima-lul mantulta/ chayk-ul mantulta/ congi-lul mantulta/ lopos-ul mantulta/ pihayngki-lul mantulta/ hwatan-ul mantulta/ kaceng-ul mantulta/ henpep-ul mantulta.

ウサギ小屋を作る / パンを作る / お粥を作る / 器を作る / ソンピョン（餅）を作る / 餃子を作る / 酒を造る / 作品を作る / 映画を製作する / スカートを作った / 本を作る / 紙を作る / ロボットを作る / 飛行機を作る / 花壇を作る / 家庭を作る / 憲法を制定する

（9）*picta* ‘作る’ ‘醸す’

kulus-ul picta/ songpyen-ul picta/ mantwu-lul picta/ swul-ul picta/ mwuluy-lul picta

器を作る / ソンピョン（餅）を作る / 餃子を作る / 酒を醸す / 物議を醸す

（10）その他 : *ssuta* ‘書く’, *kulita* ‘描く’, *ccata* ‘編む’, *seywuta* ‘建てる’, *ttwuykita* ‘揚げる’ など

sosel-ul ssuta/ si-lul ssuta/ nonmwun-ul ssuta/ chayk-ul ssuta/ ***kulim-ul kulita****/ won-ul kulita/ suwueythu-lul ccata/ pan-ul ccata/ phyen-ul ccata/ kyehoyk-ul ccata/ 5chung kenmwul-ul seywu-ta/* ***thwuykim-ul thwuykita****.*

小説を書く / 詩を書く / 論文を書く / 本を書く / **絵を描く** / 円を描く / セーターを編む / クラスを編成する / 組を組む / 計画を組む / 5階建のビルを建てる / **揚げ物を揚げる**

（6）の（ｉ）の構文パターンは下記の（12a）を見られたい。（ii）の構文パターンは, 前者と異なり, *ku sosel-ul yenghwa-lo mantul-ess-ta* ‘Lit. その小説を映画に作った’（その小説を映画化した）のように, 道具格 *-(u) lo* が道具や材料ではなく,「変化」を表すものである。また（ii）の構文パターンでは, *cista* を用いることはできない[10]。

金（1994: 144-146）によれば, *cista* は（ｉ）その製作において細工の精巧さが要求されるもの（例えば, 結婚礼服は *cista* が, 寝巻は *mantulta* が使われる）,（ii）生活の基本的な要素ないし生存のために必然的なもの,（iii）その形状化は自然的なものの場合に用いられる。一方, *mantulta* は細工の精巧さに欠けており, 特別な目的や必要に応じて作られる人為的・作為的なものであるという（任1993: 599 , 洪2001も参照）。次の例を参照されたい。

（11） a. ceypi-ka　chema mith-ey　cip-ul　{*cis-nun-ta/ mantu-n-ta*}.
つばめ－主格　屋根　下－位格　家－対格　作る－現在－断定
‘つばめが屋根の下に巣を作る。’

b. nongpwu-ka　cecso chwuksa-lul　{*cis-nun-ta/ *mantu-n-ta*}.
農夫－主格　乳牛 畜舎－対格　作る－現在－断定
‘農夫が乳牛の畜舎を建てる。’

c. tongsayng-i　{kay cip/ say cip}-ul　{**cis-nun-ta/ mantu-n-ta*}.
弟－主格　{犬 家 / 鳥 家}－対格　作る－現在－断定
‘弟が { 犬小屋 / 巣 } を作る。’

（金 1994: 144. グロスは筆者）

（12） a. emeni-ka　ssal-lo　pap-ul　{*ci-ess-ta/ *mantul-ess-ta*}.
母親－主格　米－材料　ご飯－対格　作る－過去－断定
‘母親が米でご飯を作った。’

b. kongcang-eyse　taylyang-ulo　pap-ul　{# *ci-ess-ta/ mantul-ess-ta*}.
工場－場所　大量に　ご飯－対格　作る－過去－断定
‘工場で大量にご飯を作った。

10）また, *mantulta* は「変化」を表す構文から使役表現にも使われるようになるが, *cista* はそのようには用いられない。例えば *ku nyusu-nun na-lul sulphu-key mantul-ess-ta.*（あのニュースは私を悲しくさせた）は適切だが, **ku nyusu-nun na-lul sulphu-key ci-ess-ta.* は不適格である。

しかしより本質的な理解は, 次のようであろう。*cista* は, おそらく専門的な技術が必要な「手作業」を基本にするが, 他方の *mantulta* は, 少なくとも現代語では, 機械による一律的な製造を基本にする。このことが, 精巧さに欠けており, かつ人為的・作為的という意味解釈を受けることと考えられる。一方, *cista* によって表される「手作業」は, 専門的な技術とそれから予測される複雑な手順を示す内部構造をもつため, 細工の精巧さが解釈されるということであろう。上記の *cista* の典型事例を見ると, 日常の食事作りや鳥の巣作りといったより根本的・基本的な作業がその中心にあり, かつ自然的なものである。従って, 工場で大量生産される製品には *cista* は不可能であり, すべて *mantulta* が用いられるという事実も, この説明と符合する。同様の説明は *picta* と *mantulta* の間にも適用できる。芸術家が作品として「器を作る」場合は *picta* が適切であり, 機械で大量生産する場合は *mantulta* が用いられる。

この二つの概念的な対立は, 韓国語では語彙によって区別されているが, 実はこの区別は, 2.1節で提案した MAKE の二つのスキーマ（$MAKE_1$ と $MAKE_2$）とも密接に相関している。即ち, 創作物が創作者に帰属する場合の $MAKE_1$ には *cista* が対応し, 帰属しない場合の $MAKE_2$ には *mantulta* が対応する。つまり, 疎外の概念は, 前者の *cista* には適用されず, 後者の *mantulta* に典型的に適用されるということである。このような観点から（11）を見ると, つばめの巣は, 普通それを作ったつばめに帰属し, 所有されるものであるが,（11c）の犬小屋や鳥の巣は, それを作った人（弟）には帰属せず, むしろ犬や鳥のものになってしまう。このような場合には, *cista* は不適格であると説明できる。（12）にもこの説明は有効であろう。

詩・小説・論文・本など, ことばを用いて創作活動をする場合, 創作物そのものは他に帰属しても, その知的所有権（著作権など）は作家や作者に帰属できる。従って, *cista* は許容できると予測され, 実際その事実と符合する。普通はニュートラルな *ssuta* ‘書く’ が用いられるが, *cista* も可能である。ただし, 論文だけは *cista* が不自然である。本の場合は *cista* を用いると, 著述活動といった創作の概念が適用され, 本の内的構成物（ストーリなど）を練っていくようなものとして理解される。また, 詩や小説も作者自身の空想のアイデアをもとに内的構成を形作っていくので, *cista* が自然であるといえる。これに対して, 論文は客観的事実や他人の意見・理論などを参照しながら, 内容を論理的に構成していくので, 詩や小説のように作者自身の完全なる創作ではない。「一遍の詩を創作した」や「創作詩」は自然だが,「論文を一本創作した」や「創作論文」は不自然であろう。また, 詩や小説は作者・作家と名乗るが, 論文の場合は筆者である。つまり, 論文は（論理的）構成物ではあるが, 創作物ではない。論文に *cista* が不自然であるのも, このような理由からであろう。

文法的なふるまいにおいても, *cista* と *mantulta* の間には重要な相違点が見られる。（7）の太字の例を見られたいが, ここに用いられる *cista* は, *pap(-ul) hata* ‘ご飯（を）する（作る）’

, *ssalnongsa(-lul) hata* ‘米作り（を）する’ , *mamwuli(-lul) hata* ‘締めくくり（を）する’ のように, *cista* ‘作る’ を *hata* ‘する’ に入れ替えることができる。即ち, **軽動詞構文**との繋がりを窺わせるとともに, MAKE と DO の関連が *mantulta* ではなく , *cista* を通して結びついていることがわかる（注4参照）。さらに, MAKE に属する動詞にはもう一つ注目すべき特徴がある。（10）の太字の例を見られたい。ここの MAKE タイプの動詞は当該の動詞を名詞化した形に直してそれを目的語としてとることができる。つまり , ここでは**同族目的語構文**との繋がりが予測される。この2つの構文については, 4.3節を見られたい。

次に, 生成・出現を表す $BECOME_1$ と $BECOME_2$ を取り上げ, それに属する動詞とその構文パターンを見てみよう。下記の動詞の中で, *cita* は主として自然物（自然現象）が対象となるが, *nata* と *sayngkita* には自然物の他に, 人工物も多くその対象に含まれる。また *cita* には, 意味的に両極にある生成と消滅を両方とも表す場合もあり , 主として梅雨や木陰, 染みの発生（発生したことによってその姿が現れるもの）に用いられることが多いという特徴がある。

（13）$BECOME_{1/2}$ に属する動詞 : *cita, nata, sayngkita, ttuta, thuta, totta, phita, maycta, etc*
構文パターン : （ｉ）NP_1–NOM　V*i*
（ii）NP_0–LOC/ SOUR　NP_1–NOM　V*i*

（14）*cita*

a. 生成・出現（主として, 自然物の自然発生による）
cangma-ka cita/ hongswu-ka cita/ kunul-i cita/ kulimca-ka cita/ noul-i cita/ etwum-i cita/ elwuk-i cita
梅雨が発生する / 洪水が発生する / 木陰ができる / 影ができる / 夕焼けになる / 暗くなる / 染みができる

b. 消滅（なくなる）
hay-ka cita/ tal-i cita/ pyel-i cita/ nakyep-i cita/ kkoch-i cita/ isul-i cita/ yelmay-ka cita/ salam-i cita/ ellwuk-i cita/ ***sala-cita***
日が沈む / 月が沈む / 星が散る / 枯葉が散る / 花が散る / 露が散る / 果実が散る / 人が亡くなる / 染みがなくなる /（視界から）**消える**

（15）*nata* ‘出る’ ‘現れる’ ‘生まれる’
hay-ka nata/ ssak-i nata/ ima-ey yetulum-i nata/ phi-ka nata/ ttam-i nata/ yel-i nata/ pyeng-i nata/ ton-i nata/ ssal-i nata/ inmwul-i nata/ ***natha-nata/ thaye-nata***
日が出る / 芽が出る / 額にニキビが出る / 血が出る / 汗が出る / 熱が出る / 病気にな

る / 金が出る / 米が出る（生産される）/ 人物が出る（生まれる）/ **現れる / 生まれる**

（16）*sayngkita* ‘生じる’ ‘できる’ ‘手に入る’

hanul-ey kwulum-i sayngkita/ elkwul-ey yetulem-i sayngkita/ os-ey elwuk-i sayngkita/ hok-i sayngkita/ pyeng-i sayngkita/ ay-ka sayngkita/ ton-i sayngkita/ nothupwuk-i sayngkita

空に雲が発生する / 顔にニキビができる / 服に染みができる / こぶができる / 病気が生じる（病気になる）/ 子供ができる / 金が手に入る / ノートブックが手に入る

（17）その他：　*ttuta* ‘昇る’, *thuta* ‘明ける’ ‘吹き出る’, *totta* ‘昇る’ ‘吹き出る’, *seta* ‘立つ’, *phita* ‘咲く’, *maycta* ‘実る’ など

hay-ka ttuta/ tal-i ttuta/ tong-i thuta/ ssak-i thuta/ hay-ka totta/ ssak-i totta/ mwucikay-ka seta/ kkoch-i phita, yelmay-ka maycta

日が昇る / 月が昇る / 夜が明ける / 芽が吹き出る / 日が昇る / 芽が吹き出る / 虹が立つ / 花が咲く / 実が実る

（13）の（ⅱ）の構文パターンについては, 次の例を参照されたい。（18a）のように, 二つの文（位格文と奪格文）でその意味が微妙な相違しかもたらさない場合と,（18b）と（18c）のように同じ位格を用いながらも, 意味的には大きく異なる場合もある。

（18）a.　ima-ey/ eyse　　ttam-i　　*na-ss-ta*.
額-位格 / 奪格　　汗－主格　出る－過去－断定　　‘額に汗が出た / 額から汗が出た。’

b.　os-ey　　ellwuk-i　　{*ci/ sayngki*}*-ess-ta*.
服－位格　染み－主格　できる－過去－断定　　‘服に染みができた。’

c.　os-ey　　ellwuk-i　　cal　　an　　{*ci/ *sayngki*}*-n-ta*.
服－位格　染み－主格　上手く　否定　消える－現在－断定
直訳：‘服に染みが上手く消えない。’
（服の染み（服に付いている染み）が上手く取れない（落ちない）。）

主として自然物の生成・出現を表す *cita* と異なり, *nata, sayngkita* は人工物の生成や出現を表す場合にも広く用いられることは上で述べたとおりである。*nata* は見えないところから目に見えるところへの出現, *sayngkita* は何かが自然に（どこからか）生じ（て自分のところにあ）ることを表す。例えば, *ku NP etise {na/sayngki}-ess-ni?*（その NP どこから出（てき）たの / 生じたの？）という文の NP では, 自然物に加えて人工物でもほとんど制約を受けず, 用いられる。この場合の人工物の成り立ちに関しては, 図3の「存在物の基本的スキーマ」の上に, さらに文脈から予想される複雑な過程を想定しなければならない。次の例から見てみ

よう。

（19）a. ku　ton,　nay-ka　ettehkey　hay-se（pel-ese）　*sayngki-n*
その　金　私-主格　どのように　して（稼いで）　できる－過去・連体形
ke-ntey.
もの－なのに
‘その金, 私がどんなに苦労して手に入れたものだか, わかる？’

b. *ku　ton,　nay-ka　ettehkey　hay-se（pel-ese）　*na-n*
その　金　私－主格　どのように　して（稼いで）　出る－現在・連体形
ke-ntey.
もの－なのに
意図 : ‘その金, 私がどんなに苦労して手に入れたものだか, わかる？’

（20）　etise　ton-i　com　{*sayngki/ na*}-se　onul-un　nay-ka
どこから　金-主格　少し　{生じる/出る}－て　今日－主題　私－主格
hanthek　ssul-kkey.
いっぱい　使う－約束　‘ある所から金が少し入ったので, 今日は私がおごるわ。’

（21）a. ne　ku　ton　etise　*na-n*　ke-ni?
お前　その　金　どこから　出る－現在・連体形　もの－疑問
‘お前, その金どこから出たのものなの？（どうやって手に入ったの？）’

b. nay-ka　alpa　hayse　*pe (l)-n*　ke-ta,　way?
私－主格　アルバイト　して　稼ぐ－過去・連体形　もの－断定　なぜ
‘私がバイトして稼いだ金だってば。’

（19）に見られるように, *hata* ‘する’ や *pelta* ‘稼ぐ’（GET_1 タイプ）のような（能動的な）ものは *sayngkita* との共起を許すが, *nata* とは共起しない。しかし,（20）のように某所から金をもらった（GET_2 タイプ）ことを含意する（受動的な）文脈では, 両方とも適格に受け入れられる（GET タイプについては3.3節参照）。また, *nata* を用いた質問（21a）に対する（21b）では, 質問者の予測と異なり, そのお金が自分で努力して得た収入であると不満を込めて答えている。というのは,（21a）の質問で, お金の出所が無為に得たものであることがほのめかされているためである。

まとめると, 人工物と共起する *sayngkita, nata* は, 日本語の対訳からもわかるように, 実際の状況では GET による所有物の移動を前提にするものである。しかし, 図3の「存在物の基本的スキーマ」が示すように, これらの動詞は, 本来は自然物の生成・出現を表現するもの

である。そのため, 言語的意味と我々の認知を通しての意味との間にはずれが生じることになる。具体的に述べると, そもそも人工物とはMAKEによって世の中に生成・出現し, 我々はそれをGETすることによって, 我々の手元に出現させ, 手に入れることができる。しかし, 言語表現（動詞）が表す意味は, この一連の事態の中の極一部にしか対応していない――即ち,（我々の手元に）生成・出現する最後の段階（（22）のⅢ）の部分だけを選択的に選んで言語化している――ということである。これを定式化したのが（22）である。（Ⅰ）の段階では, 存在物の成り立ちが「存在物の基本的スキーマ」に基づいて理解され,（Ⅱ）の段階では, それがどう我々の目の前に現れたかが理解できる文脈が含意され, これが示すGETの状況から, その次のBECOMEの状況（Ⅲ）へと事態が運ばれることを表す。従って,（22）のスキーマを用いると, これらの動詞の意味記述が可能になり, さらに,（Ⅱ）の段階の（隠れた）文脈で決定的な相違があることを示すことができる。

（22）**人工物の場合**[11]

	（Ⅰ）	（Ⅱ）	（Ⅲ）
sayngkita のスキーマ :	(MAKE ⇒)	(GET_1 ⇒)	BECOME *y*(— BE *y, z* — HAVE *z, y*)
	(MAKE ⇒)	(GET_2 ⇒)	BECOME *y*(— BE *y, z* — HAVE *z, y*)
nata のスキーマ :	(MAKE ⇒)	(GET_2 ⇒)	BECOME *y*(— BE *y, z* — HAVE *z, y*)

他にも, 上記のスキーマを受け入れると, 次のような一般化もできる。

（23）人工物の生成・出現を表すBECOMEは, MAKEやGETを前提にして成立する[12]。

上記の（14-17）の動詞群でもう一つ強調すべき点は, 韓国語において生成・出現を表す自動詞は, 自然現象を基盤にして「**自然物から人工物へ**」の拡張が見られることである。

その一方で, 人間の「誕生」に関わる表現を見ると,（22）のMAKE, GET, BECOME, BE, HAVEはすべて言語化できることがわかる。これについては,（24）を参照されたい。誕生の表現は, 韓国語では, 日本語の「生まれる」や英語の *be born* のように受身表現は用いられ

---

[11] MAKEとGETがスキーマ的に隣接していることは, *eti kase ton com {pel/ pilli}-e osio.*（どこかに行って金をちょっと｛稼いで / 借りて｝きてください）の代わりに, *eti kase ton com mantul-e osio.*（どこかに行って金をちょっと作ってきてください）のように交替表現ができることからも確認される。

[12] この一般化には若干注意が必要である。第3節の冒頭で紹介した「砂漠の中に新しいビルが現れた」のようなBECOMEでは, GETスキーマは要求せず, MAKEだけで成立する。しかし, GETスキーマが要求される文脈であれば, そこにはMAKEスキーマも必ず要求される。

ず, 自然物と人工物の両方の「出現」を表すことができる *-nata*（BECOME タイプ）が用いられる。

（24）a. sinhon chesnalpam-ey　ay-lul　*mantul-ess-ta.*（MAKE）
新婚初夜－に　子供－対格　作る－過去－断定　‘新婚初夜に子供を作った。’

b. sin-i　ay-lul　*cemciha-y-cwu-si-ess-ta.*（GET_2）
神－主格　子供－対格　授ける－くれる－尊敬－過去－断定
直訳：‘神が子供を授けてくださった。’（神から子供を授かった。）

c. sinhon chesnalpam-ey　ay-ka　*sayngki-ess-ta.*（BECOME）
新婚初夜－に　子供－主格　生じる－過去－断定　‘新婚初夜に子供ができた。’

d. sinpwu　pay-s　sok-ey　ay-ka　*iss-ta.*（BE）
新婦　腹－所有　中－位格　子供－主格　いる－断定
‘新婦のお腹（の中）に子供がいる（妊娠している）。’

e. anay-ka　ay-lul　*kaci-ess-ta.*（HAVE）
妻が　子供－対格　持つ－過去－断定　‘妻が子供を身籠った（妊娠した）。’

f. ay-ka　*thaye-na-ss-ta.*（BECOME）
子供－主格　生まれる－過去－断定　‘子供が生まれた（誕生した）。’

以上から, 韓国語の MAKE タイプには意図的行為による「創作物の作成」を表す他動詞類が属しており, 二つのスキーマ（$MAKE_1$ と $MAKE_2$）を区別する語彙（動詞）の存在も確認された。一方, $BECOME_1$ と $BECOME_2$ には生成・出現を表す自動詞類が属しており, 自然現象を基盤にして「自然物から人工物へ」の拡張が見られる。意味的な観点から見ると, MAKE と人工物の生成・出現を表す $BECOME_2$ は, 意味的な他動詞と自動詞の関係であると見なすことができる（例えば, 日本語では「ご飯を作った」と「ご飯ができた」。4.5節参照）。形態的な観点から見ると, MAKE と $BECOME_1$/$BECOME_2$ に属する動詞は, ほとんどが他動詞基本（無標）と自動詞基本（無標）である。また, MAKE タイプと自然現象を表す $BECOME_1$ タイプには, 基本的に, 対応する自動詞または他動詞がないという特徴がある[13)]。

---

13) 人工物の生成・出現を表す $BECOME_2$ の場合には, *ton-i nata.* ‘お金が出（てく）る’ ‘お金ができる’ と *ton-ul na-y-ta.* ‘お金を出す’ のように形態的には対応しても意味的には対応しないものもある。また, 自然現象に関しても, 例えば *phita* ‘咲く’ と *phi-wu-ta* ‘咲かせる’ のように対応する他動詞がある場合もある。しかし, これらは「薔薇の花がきれいに咲いた」に対して「薔薇が花をきれいに咲かせた」といった具合になり, 一般的な自他の意味的関係とは異なる（これについては, 4.2節参照）。

3.2　CAUSE タイプと $BECOME_3$/$MOVE_3$ タイプ

第2節では CAUSE を二分して, 状態変化の他動詞を CAUSE1, 位置変化の他動詞は $CAUSE_2$ として区別した。そして, それぞれに対応する自動詞に関しても, 研究者によって様々な表示の仕方があるが, 本稿では, 状態変化は BECOME3, 位置変化は $MOVE_3$ と表記した。これに従い, まずは $CAUSE_1$ と $BECOME_3$（状態変化）, $CAUSE_2$ と $MOVE_3$（位置変化）に属する動詞および構文パターンを簡略に示す。

（25）$CAUSE_1$ に属する動詞：　*nok-i-ta* ‘溶かす’, *el-li-ta* ‘凍らせる’, *ssek-hi-ta* ‘腐らせる’, *etc*
　　$BECOME_3$ に属する動詞：　*nokta* ‘溶ける’, *elta* ‘凍る’, *ssekta* ‘腐る’, *etc*
　　構文パターン：　NP_1–NOM　NP_2–ACC　V*t*
　　NP_1–NOM　V*i*

（26）$CAUSE_2$ に属する動詞：　*ol-li-ta* ‘上げる’, *tul-i-ta* ‘入れる’, *chay-wu-ta* ‘満たす’, *etc*
　　$MOVE_3$ に属する動詞：　*oluta* ‘上がる’, *tulta* ‘入る’, *chata* ‘満ちる’, *etc*
　　構文パターン：　NP_1–NOM　（NP_2–LOC）　NP_3–ACC　V*t*
　　（NP_1–LOC）　NP_2–NOM　V*i*

位置変化の構文パターンについては若干説明が必要であるため, 次を見られたい。（26）の構文パターンには位格名詞句が, 必須項でない場合（27）と要求される場合（28-29）がある。さらに, 後者には, 位格名詞句の語順が, 自動詞では文頭に, 他動詞では対格名詞句の前に来なければ不自然な場合（28）と比較的自由に前後に入れ替え可能な場合（29）がある。ここでは（26）に示したものを基本語順と想定している[14]。（位格名詞句の語順については, 3.5 節と 4.4 節も参照されたい。）

（27）a.　cengpwu-ka　sopisey-lul　*ol-li-ess-ta*.
　　政府－主格　消費税－対格　上がる－*li*－過去－断定　‘政府が消費税を上げた。’
　　b.　sopisey-ka　*oll-ass-ta.*
　　消費税－主格　上がる－過去－断定　‘消費税が上がった。’

---

[14] Google 検索（2008年8月7日）の結果によれば, *mwul-ul yokco-ey chay-wu-ko*（水を浴槽に溜めて）が76件あるのに対して, *yokco-ey mwul-ul chay-wu-ko*（浴槽に水を溜めて）は328件あった。自動詞文でも, *mwul-i yokco-ey cha*（水が浴槽に満ちて（溢れて））は1件のみであるが, *yokco-ey mwul-i cha*（浴槽に水が満ちて（溢れて）は7件あった。

（28）a. emeni-ka {os-ey mwul-ul/ ?*mwul-ul os-ey} *tul-i-ess-ta.* [15]
母親－主格 {服－位格 水－対格 / 水－対格 服－位格} 入る－*i*－過去－断定
直訳：‘母親が服に水を入れた。’（母親が服を染めた。）

b. {os-ey mwul-i/ ?*mwul-i os-ey} *tul-ess-ta.*
{服－位格 水－主格 / 水－主格 服－位格} 入る－過去－断定
直訳：‘服に水が入った。’（服が染まった。）

（29）a. emeni-ka {yokco-ey mwul-ul/ mwul-ul yokco-ey} *chay-wu-ss-ta.*
母親－主格 {浴槽－位格 水－対格 / 水－対格 浴槽－位格} 満ちる－ *wu*－過去－断定
‘母親が浴槽に水を溜めた。’／‘母親が水を浴槽に溜めた。’

b. {yokco-ey mwul-i/ mwul-i yokco-ey} katuk *cha-ss-ta.*
{浴槽－位格 水－主格 / 水－主格 浴槽－位格} いっぱい 満ちる－過去－断定
‘浴槽に水がいっぱい溜まった。’／‘水が浴槽にいっぱい溜まった。’

次に, 状態変化動詞・位置変化動詞の自他対応のパターンを見てみよう。状態変化・位置変化の動詞は, 形態的な自他対応の関係を表すのが一般的である。次の3パターンに集約される。（ⅰ）動詞語幹に派生接辞 *-i/-hi/-li/-ki* が付加される場合,（ⅱ）動詞語幹に派生接辞 *-wu/-kwu/-chwu* が付加される場合,（ⅲ）動詞語幹に助動詞 *-cita* が連結辞の *-e/a* を伴って付加される場合である。（ⅰ）は自他だけに限らず, 自発・可能・受身と使役まで表すことができる（鄭1999 , 2008 a）。（ⅱ）は主に他動詞化に用いられる。（ⅲ）は自動詞化のみである。また自動詞化の場合は自発・可能・受身も表現可能である。派生の方向性としては両極化の場合も存在する。

（30）*-i/-hi/-li/-ki*

自動詞基本	＜他動詞化＞	他動詞基本	＜自動詞化＞
kkulhta ‘沸く’	*kkul-i-ta* ‘沸かす’	*makta* ‘詰める’	*mak-hi-ta* ‘詰まる’
maluta ‘乾く’	*mal-li-ta* ‘乾かす’	*tatta* ‘閉める’	*tat-hi-ta* ‘閉まる’
sikta ‘冷める’	*sik-hi-ta* ‘冷ます’	*yelta* ‘開ける’	*yel-li-ta* ‘開く’
sakta ‘発酵する’	*sak-hi-ta* ‘発酵させる’	*samta* ‘煮る’	*sam-ki-ta* ‘煮える’
nulta ‘増える’	*nul-li-ta* ‘増やす’	*kalta* ‘換える’	*kal-li-ta* ‘換わる’

[15]（28）の解釈で日本語と韓国語の捉え方の違いが見られる。韓国語では「水」（染料の混ざった色水）の位置変化としてその事態が捉えられているが, 日本語では「服」の状態変化として捉えられている。韓国語の場合, 服の状態変化は語用論的に理解されることになるだろう。

cwulta ‘減る’	*cwul-i-ta* ‘減らす’	*pakkwuta* ‘変える’	*pakkwu-y-ta* ‘変わる’
namta ‘残る’	*nam-ki-ta* ‘残す’	*huntulta* ‘振る’	*huntul-li-ta* ‘揺れる’

（31）*-wu/-kwu/-chwu*

自動詞基本	**＜他動詞化＞**
thata ‘燃える’	*thay-wu-ta* ‘燃やす’
chata ‘満ちる’	*chay-wu-ta* ‘満たす’
pita ‘空く’	*pi-wu-ta* ‘空にする’
macta ‘合う’	*mac-chwu-ta* ‘合わせる’
cita ‘消える’	*ci-wu-ta* ‘消す’

（32）*-cita*

他動詞化	**＜両極化＞**	**自動詞化**	**他動詞基本**	**＜自動詞化＞**
ttele-ttulita ‘落とす’		*ttele-cita* ‘落ちる’	*kkayta* ‘割れる’	*kkay-cita* ‘割る’
neme-ttulita ‘倒す’		*neme-cita* ‘倒れる’	*pwusuta* ‘壊す’	*pwuse-cita* ‘壊れる’
mwune-ttulita ‘崩す’		*mwune-cita* ‘崩れる’	*kkuta* ‘消す’	*kke-cita* ‘消える’
phe-ttulita ‘広げる’		*phe-cita* ‘広がる’		
epa-y-ta ‘なくす’		*epe-cita* ‘なくなる’		

-cita については, もう少し詳しい説明が必要である。まず（32）は, 前節の自然発生・生成・出現・消滅を表す本動詞 *cita* が助動詞化ないし接辞化したものである[16]（Lee 1993 : 109-119 , 鄭 1999 : 第7章）。意味的に考えると,（32）の自動詞はある状態から別の状態への生成・出現を表すといえるが, 対象物に焦点を当てて見ると, 下向きの位置変化や形の変形による（元の位置ないし元の形からの）「消滅」を表すともいえる[17]。（32）にはそのような意味を表すものが多い。次に, 実は, *-cita* の付加は非常に（上記の三つの形式の中で最も）生産的である。（33）のように他動詞のみならず, 自動詞や形容詞にも *-cita* が付加でき, さらには（34）のように, *-i/-hi/-li/-ki* によって一段, 自動詞化したものにも後続できる。意味的には自発・可能・受身, そして形容詞の場合は自然変化を表す（Lee 1974 , Lee 1993 , 鄭 1999 , 2008 a, 円山 2009）。従って, *-i/-hi/-li/-ki* とは機能的なオーバーラップが起こっていることがわかる[18]。つまり, ここでは**自然発生を表す本動詞 *cita* から状態変化を表す助動詞 *-cita* へ,**

16）（32）に挙げた自動詞は, 辞書にも自動詞用法として記載され, 登録されているものである。

17）Lee（1993 : 110）によれば, 本動詞 *cita* の典型的な意味は下向き（downward）の動きを表す。

18）両者の目立った相違点は受身に見られる。*-i/-hi/-li/-ki* による受身は使役と構文を共有することができ, よって有生物主語をとることができる。これに反して, *-cita* による受身ではそれが不可能で, 主に無生物主語をとる。つまり, 両者で役割分担が見られる（鄭 2008 a）。

さらにヴォイス・マーカーへとその用法の展開が見られるわけである。注目すべき点は, その展開の背後には「**自然物から人工物へ**」のシフトが伴われていること, そして,（33c）のように他ならぬ MAKE タイプの他動詞（建てる, 作る, 描くなど）に適用されたときに, 最も安定した受身の *-cita* が確立していくことだろう。つまり, 受身文に見られる動作主の言語的導入は, 人工物へとシフトした *cita* と MAKE タイプ動詞の連結から創作者（個人）を表現できるようになったことによって可能になったと考えられる（4.5節も参照）。

（33）a. nalssi-ka　cemcem　*malk-a-ci-n-ta.*（形容詞 + *cita*: 自然変化）
天気－主格　段々　晴れる－*ci*－現在－断定
‘天気が段々晴れていく。’

b. elum-i　cal　an　*el-e-ci-n-ta.*（自動詞 + *cita*:（不）可能）
氷－主格　よく　否定　凍る－*ci*－現在－断定
‘氷がなかなか凍らない（凍るという状態へと移行しない　（できない））。’

c. i　kulim-un　Phikhaso-ey uyhay　*kuli-e-ci-ess-ta.*（他動詞 + *cita*: 受身）
この　絵－主題　ピカソ－によって　描く－*ci*－過去－断定
‘この絵はピカソによって描かれた。’

（34）insayng-un　sal-ki　elyep-ta nuntey　si-ka　ilehkey　swuypkey
人生－主題　生きる－名詞化　難しい－というのに　詩－主格　こんなに　た易く
ssu-y-e-ci-nun　kes-un　pwukkulew-un　il-ita.（*i* + *cita*: 自発）
書く－*i*－*ci*－現在・連体形　こと－主題　恥ずかしい－現在・連体形　事－断定
‘人生は生きがたいものなのに, 詩がこうたやすく書けるのは恥ずかしいことだ。’
（日本語訳は, 伊吹郷訳『尹東柱全詩集』「やすやすと書けた詩」から掲載）
（鄭 1999: 208 から一部修正して引用）

最後に, 状態変化・位置変化の他動詞と意志性の関係について述べておこう。MAKE に属する動詞と異なり, これらの他動詞は意志性に関して中立的である。例えば,（35）では意志性に関して何も表現しなくても, **非意図的事象**の方が先に解釈される。従って,（35）を意図的事象として理解するためには,「わざと」のような副詞を入れて修正を行う必要がある。ここでの問題は, 意志性に関して二つの異なる事象（わざと割った場合と誤って割った場合）が同じ他動詞構文に結びついていることである。これは CAUSE タイプの目立った特徴の一つであろう。そういった背景に基づいて, 角田（1990: 85）は, 意志性は他動性の原型の特徴ではなく, 他動詞文の特徴でもないとまで主張したのである（注3参照）。非意図的他動詞構文に関する本稿の分析は, 4.1節を見られたい。

（35）Ai-ka　kkochpyeng-ul　*kkay-ss-ta.*
子供－主格　花瓶－対格　割る－過去－断定
‘子供が花瓶を割った。’

3.3　GIVE/GET タイプ

GIVE/GET タイプに属する動詞は, 典型的には所有物の移動を表す。さらに, GET には対象物を能動的に手に入れる GET_1 と, 受動的に手に入れる GET_2 がある。ここでいう能動的という意味は, 所有物の移動が貰い手によって引き起こされることをいい, 一方受動的とは, それが送り手によって引き起こされることをいう[19]。後者は意味的に GIVE と対応する。それぞれの動詞と構文パターンは, 次のようである。

（36）GIVE に属する動詞：*cwuta* ‘やる’, *tulita* ‘上げる’, *kenneycwuta* ‘渡す’, *pilliecwuta* ‘貸す’, *kaluchita* ‘教える’, *peyphwulta* ‘施す’, *pachita* ‘差し上げる’ ‘他に収める’, *ponayta* ‘送る’, *phalta* ‘売る’, *pelita* ‘捨てる’, *etc*
構文パターン：　NP_1–NOM　NP_2–DAT/ LOC　NP_3–ACC　V*t*

（37）GET_1 に属する動詞：*ppayasta* ‘奪う’, *nakkwuechayta* ‘ひったくる’, *hwumchita* ‘盗む’, *sata* ‘買う’, *pelta* ‘稼ぐ’, *ketwuta* ‘集める’, ‘収穫する’, *mouta* ‘集める’, *capta* ‘つかむ’, *cipta* ‘握る’, *cwupta* ‘拾う’, *etc*
GET_2 に属する動詞：*patta* ‘もらう’, *kenneypatta* ‘渡してもらう’, *pillita* ‘借りる’, *etta* ‘無為に得る’, *kaluchim-ul patta* ‘教えてもらう’, ‘教わる’, *paywuta* ‘学ぶ’ ‘習う’, *etc*
構文パターン：　（ⅰ）NP_1–NOM　（NP_2–DAT/ SOUR）　NP_3–ACC　V*t*
（ⅱ）NP_1–NOM　（NP_1–GEN　NP_2–LOC）　NP_3–ACC　V*t*

構文パターンについては若干説明が必要である。まず, GIVE の構文パターンは第二名詞句の着点が, 有生物（人間と動物）の場合は与格の *-eykey* が用いられ（38a）, 無生物（機関・

19）厳密に考えると, 行為の起源の追求は無限に後退する可能性があるため, GET の下位分類は直ちに困難に落ちいる可能性がある。例えば「もらう」は何も仕向けなくても只でもらう場合もあるが,「借りる」と同様に, 貰い手側が頼むなど, そのように仕向けだ結果「もうら」という状況が発生する場合もある。これを因果関係の観点から捉えると, 後者はむしろ, 貰い手が事態を引き起こしていると見ることもできよう。しかしここでは, 所有物の移動が起こった場合, それを引き起こす行為の直接的な出どころはどこか, あるいはその権限は誰かもっているか, という観点から定義している。そう考えると, 後者も前者同様, その原因は送り手側にあることがいえる。

場所・もの）では位格の *-ey* が用いられる（38b）。

（38）a. Chelswu-nun　senpay-{eykey/ *ey}　ton-ul　*pilliecwu-ess-ta.*
チョルス－主題　先輩－{与格/＊位格}　金－対格　貸す－過去－断定
‘チョルスは先輩に金を貸してやった。’

b. Kim mo ssi-nun　ku hoysa-{*eykey/ ey}　taykum-ul　*pilliecwu-ess-ta.*
金某氏－主題　その会社－{*与格/位格}　大金－対格　貸す－過去－断定
‘金某氏はあの会社に大金を貸してやった。’

次に, GET の構文パターンでは,（ⅰ）の第二名詞句の起点が,（39a）のように有生物の場合は与格 *-eykey* と奪格 *-eykeyse* が両方とも可能であるが, 無生物の奪格 *-eyse* は不可能である。一方,（39b）のように機関・場所の場合には, 無生物の奪格 *-eyse* のみが可能である[20]。しかし,（39c）のように起点名詞句の代わりに場所名詞句が用いられる場合や,（39d）のように場所名詞句も不要の場合もある。さらに起点名詞句の代わりに,（40）のように着点名詞句を言語化した, 即ち（37）（ⅱ）の構文パターンを示す場合もある。これらの構文の分布を（4）の GET スキーマから見ると, 事態の最初の局面に見られる起点名詞句が「人間から場所へ」, さらには言語化されなくてもよい方向へと進んでいくと, 事態の最終局面を細かく描写することが可能になり,（40）のように着点名詞句も許容されると考えられる。

（39）a. Chelswu-nun　senpay-{eykey/ eykeyse/ *eyse}　ton-ul　*pilli-ess-ta.*
チョルス－主題　先輩－{与格/奪格/＊奪格}　金－対格　借りる－過去-断定
‘チョルスは先輩{に/から}金を借りた。’

b. Kim mo ssi-nun　unhayng-{*eykey/ *eykeyse/ eyse}　taykum-ul　*pillie-ess-ta.*
金某氏－主題　銀行－{与格/＊奪格/奪格}　大金－対格　借りる－過去－断定
‘金某氏は銀行から大金を借りた。’

c. Chelswu-ka　kil-eyse　ton-ul　*cwuw-ess-ta.*
チョルス－主格　道－場所　金－対格　拾う－過去－断定
‘チョルスが道端で金を拾った。’

d. Chelswu-ka　wuphyo-lul　*mo-ass-ta.*
チョルス－主格　切手－対格　集める－過去－断定
‘チョルスが切手を集めた。’

20）他にも中立的な奪格 *-(u)lopwuthe* ‘から’ があるが, 有生・無生による制約はない。

（40）wuli　ay-nun　paykil ttay　（son-ey）　yenphil-ul　*cip-ess-eyo.*
私たち　子供－主題　100日　とき　（手－位格）　鉛筆－対格　握る－過去－尊敬.断定
‘わが子は誕生100日目のお祝いのときに, 鉛筆を（選んで自分の）手に取ったんですよ。’

韓国語の注目すべき特徴は, **使役と受身**が, 所有物の移動を表すGIVE/GET構文パターンに依拠して表現されたり, GIVE/GETに属する動詞を直接用いて表現されたりする点である（鄭1999, 2008a）。まず受身を見よう。（41b）の受身表現では, GET_2に属する動詞が用いられている。この場合は, 対応する能動文も「両親がチョルスに愛を与えた」のように, GIVE構文として理解できるものとなっている（朴1989参照）。同様に *conkyeng-hata* ‘尊敬-する’と *conkyeng-patta.* ‘尊敬-もらう’（尊敬される）のペアでも, 前者を *sensayng.nim-kkey conkyeng-ul ponayta.* ‘先生に尊敬を送る’に言い換えることができる。つまり, このタイプの受身文はGIVE/GET_2のスキーマおよびその構文パターンに依拠して成立することがわかる。このことから, **GET_2構文から受身解釈へ**のシフトには, 具体物の所有移動から抽象物の所有移動へ（特に愛情や尊敬のように感情を表すものへ）の拡張が関与していることが理解できる。

（41）a. pwumo.nim-i　Chelswu-lul　*salangha-si-ess-ta.*　（能動文）
両親.尊敬－主格　チョルス－対格　愛する－尊敬－過去－断定
‘両親がチョルスを愛した。’

b. Chelswu-ka　pwumo.nim-eykey　*salang*（*-ul*）　*pat-ass-ta.*（受身文）
チョルス－主格　両親.尊敬－与格　愛（－対格）　もらう－過去－断定
直訳：‘チョルスが両親に愛（を）もらった。’（チョルスが両親に愛された。）

次に使役を見てみると, 今度は非使役形動詞と使役形動詞の意味対立が, GET_1とGIVEに属する動詞と同様の所有物の移動を表すことがわかる。次を見られたい。ここでは具体物の移動が関わるもののみを掲載している。

（42）非使役形動詞		使役形動詞	
ipta	服を自分の身体の上に着る	*ip-hi-ta*	服を他者の身体の上に着せる
ssuta	帽子を自分の頭にかぶる	*ssu-ywu-ta*	他者の頭にかぶせる
sinta	靴を自分の足に履く	*sin-ki-ta*	靴を他者の足に履かせる
epta	子供を自分の背中に負ぶう	*ep-hi-ta*	子供を他者の背中に負ぶわせる
tulta	荷物を自分の手にもつ	*tul-li-ta*	荷物を他者の手にもたせる

mwulta	物を自分の口に咥える	*mwul-li-ta*	物を他者の口に咥えさせる
kkita	指輪を自分の指にはめる	*kki-wu-ta*	指輪を他者の指にはめる
ita	荷物を自分の頭の上に載せる	*i-wu-ta*	荷物を他者の頭に載せる

ただし, 非使役形動詞は, 第二名詞句の起点（即ち, どこから取ってきたか）を言語化しないので,（37）（ⅰ）の構文パターンは表せない。しかし,（ⅱ）の構文パターンでは表すことができる。一方, 使役形動詞は第二名詞句の着点を明示的に示すことができるので, 所有物移動の観点から見た場合, 意味の面だけでなく, 統語の面においても, 非使役形と使役形は GET_1 と GIVE の対立と類似する特徴をもつ。構文パターンについては（43）を見られたい。（44）のように, 形態的な使役形をもたない場合では, GIVE タイプの動詞が直接使役表現に用いられる場合もある。

（43）a. emeni-ka　meli-ey　moca-lul　*sse-ss-ta.*（非使役形）
母親が－主格　頭－位格　帽子－対格　かぶる－過去－断定
‘母親が（自分の頭に）帽子をかぶった。’

b. emeni-ka　{ai-uy　meli-ey/ ai-eykey}　moca-lul　*ssu-ywu-ess-ta.*（使役形）
母親－主格　{子供－属格　頭－位格/ 子供－与格}　帽子－対格　かぶる－使役－過去－断定
‘母親が { 子供の頭に / 子供に } 帽子をかぶせた。’

（44）a. ai-ka　son-ey　ton-ul　*cwuy-ess-ta.*（GET_1 タイプ）
子供－主格　手－位格　金－対格　握る－過去－断定　‘子供が手に金を握った。’

b. emeni-ka　{ai-uy/ ai-eykey}　son-ey　ton-ul　*cwuy-e-cwu-ess-ta.*（GIVE タイプ）
母親－主格　{子供－属格/ 子供－与格}　手－位格　金－対格　握る－やる－過去－断定
直訳：‘母親が { 子供の / 子供に } 手に金を握ってやった。’
‘母親が子供（の手）に金を（渡して）握らせてやった。’

以上から, 上記の非使役形と使役形の動詞は, 韓国語の場合, 所有物移動を表す GET_1 と GIVE に属する動詞に値するものであることがわかる。また, GIVE/GET 構文と同様に, 統語構造においても非使役と使役の対立は, 常に結合価変化をもたらす必要はないということも, このことから予測されよう（鄭2005 , 2006: 第4章参照）。最後に, 理論的に考えると, 非使役形動詞も**能動的な GET_1 から受動的な GET_2 へ**の意味的なシフトが起これば,（41b）のように, 受身解釈を受けることも可能性として考えられる。これに関する具体例は, 4.1節で取り上げる。

3.4　ACT/ACT ON タイプ

ACT/ACT ON タイプには, 主に活動・打撃・接触を表す動詞が属し, 意味的にも統語的にも連続性が見られる。ACT *x* は参与者一つで項数も一つの場合, ACT ON *x, y* は参与者も項数も二つの場合, ACT ON *x, x'* は参与者は一つであるが項数は二つの場合を表す。意味的には, ACT *x* と ACT ON *x, x'* は, 身体を使った動作が他に向かわず, 自分の領域内（典型的には身体部分）に納まる（再帰的な）ものであるが, ACT ON *x, y* は典型的には自分の領域外に行為が及ぶものである。それぞれに属する動詞と典型的な構文パターンは, 以下のようである。

（45）ACT *x* に属する動詞 :　*wusta* ‘笑う’, *wulta* ‘泣く’, *cata* ‘寝る’, *nolta* ‘遊ぶ’, *ketta* ‘歩く’, *ttwuyta* ‘跳ぶ’, *tallita* ‘走る’, *etc*

構文パターン :　NP_1–NOM　V*i*

（46）ACT ON *x, y* に属する動詞 :　*ilkta* ‘読む’, *chata* ‘蹴る’, *chita* ‘打つ’, *ttaylita* ‘殴る’, *palpta* ‘踏む’, *mancita* ‘触る’, *etc*

構文パターン :　（ｉ）NP_1–NOM　NP_2–ACC　V*t*

（ii）NP_1–NOM　NP_2–GEN　NP_2–ACC　V*t*

（47）ACT ON *x, x'* に属する動詞 :　（ｉ）*meli-lul kkattakita* ‘頭を傾げる’, *tali-lul huntulkelita* ‘足をゆらゆらと動かす’, *mom-ul wumcikita* ‘体を動かす’

（ii）*pal-ul kwullita* ‘地団駄を踏む’, *son-ul huntulta* ‘手を振る’, *etc*

構文パターン :　NP_1–NOM（NP_1–GEN）NP_2–ACC　V*t*

ACTに属する動詞とその構文パターンについては, 特に言及を要しないだろう。ACT ON *x, x'* に属する動詞は, 意味的には ACT *x* に近く, 統語的には ACT ON *x, y* に近い。つまり, 両者の間の中間的な存在である。また, これらの動詞は身体部分以外にも, *yenphil-ul son-ey cwuy-ko kkattaki-ess-ta.* ‘鉛筆を手に握って（鉛筆の先端部分を上下に）動かした’, *kispal-ul (son-ey cwuy-ko) huntul-ess-ta.* ‘旗を（手に握って）振った’, *cwusawuy-lul kwulli-ess-ta.* ‘さいころを（投げて）転がした’ のように,「**身体からの延長**」として考えられるものもその使用範囲に入る。しかしながら, ACT ON *x, y* に属する動詞のように, 完全に自分の領域の外にあり, 空間的にも分離されているものに対して働きかける――例えば, 自分の手にもっていない鉛筆や旗, さいころなどを動かす――ことはできない。もし, そのよう状況にこれらの動詞を用いれば, 神秘の力の持ち主やマジックとしてしか理解されないであろう。

（47）の二つの分類は, 自動詞用法の有無による区別である。（ｉ）には同形動詞による

自動詞用法があるが,（ⅱ）にはない。つまり,（ⅰ）は自他両用動詞である[21]。よって, 韓国語のこのタイプの動詞では, *aki-ka pal-ul wumciki-ess-ta.* ‘赤ちゃんが足を動かした。’ と *aki-ka pal-i wumciki-ess-ta.* ‘赤ちゃんが足が動いた。’ の自他ペアのように, **二重主格構文**が作れる。

実は, ACT *x* タイプの自動詞も**同族目的語構文**や**軽動詞構文**のような統語的手段による多様な形の他動詞文を作ることができる（4.3節参照）。また ACT ON *x, y* タイプも, 普通は（48a）のような構文パターンをとるが, 特に打撃動詞・接触動詞の場合は（48b）のように,（48a）の第二名詞句からその身体部分を取り出し, それに対格を与えた形の構文を作ることができる。よって,（48b）の二つの名詞句（属格名詞句と対格名詞句）は譲渡不可能な所有関係であることがわかる。このような条件を揃えると,（46）の（ⅱ）から（例えば（48b）),（48c）といった**二重対格構文**への発展可能も出てくる。これについては, 4.4節を見られたい。

（48）a. Chelswu-ka　Yongi-lul　*cha-ss-ta.*
チョルス－主格　ヨンイ－対格　蹴る－過去－断定
‘チョルスがヨンイを蹴った。’

b. Chelswu-ka　Yengi-uy　engtengi-lul　*cha-ss-ta.*
チョルス－主格　ヨンイ－属格　尻－対格　蹴る－過去－断定
‘チョルスがヨンイのお尻を蹴った。’

c. Chelswu-ka　Yengi-lul　engtengi-lul　*cha-ss-ta.*
チョルス－主格　ヨンイ－対格　尻－対格　蹴る－過去－断定
‘チョルスがヨンイのお尻を蹴った。’

3.5　MOVE$_1$/MOVE$_2$ タイプ

第2節で移動を表す MOVE を三つに分類した。動作主の能動的な移動を表す MOVE$_1$ と自然物の自発的な移動を表す MOVE2, そして位置変化などで対象物の受動的な移動を表す MOVE$_3$ である。MOVE$_3$ については3.2節で取り上げたので, ここでは残りの二つについて述べる。

MOVE$_1$ と MOVE$_2$ に属する動詞とその構文パターンは次である。両者は共有できる動詞が多く, 構文パターンもほぼ類似している。

21）韓国語学では, 自他両用動詞は中立動詞, 中間動詞, 能格動詞など様々な名前で呼ばれている。鄭（2006 : 41）参照。

（49）MOVE$_1$に属する動詞：*kata* ‘行く’, *ota* ‘来る’, *oluta* ‘上がる’, *naylita* ‘下りる’, *tolta* ‘回る’, *ttenata* ‘離れる’, *thata* ‘乗る’ ‘伝う’, *tomangchita* ‘逃げる’, *tochakhata* ‘到着する’, *etc*

MOVE$_2$に属する動詞：*kata* ‘行く’, *ota* ‘来る’, *oluta* ‘上がる’, *naylita* ‘降りる’, *olta* ‘回る’, *huluta* ‘流れる’, *thata* ‘伝う’, *tahta* ‘届く’, ‘着く’, *etc*

構文パターン：（ｉ）NP$_1$–NOM　NP$_2$–GOAL　V*i*

（ii）（NP$_1$–SOUR）NP$_2$–NOM　V*i*

（iii）NP$_1$–NOM　NP$_2$–ACC　V*t*

では, 構文パターンについて簡単に見てみよう。（50）は動作主による移動事象,（51）は自然物による移動事象である。上記の構文パターン（ｉ）で, 着点名詞句の格標示に若干相違点が見られるが（(50a）と（51a)), それ以外は共通している。また, 両者とも経路名詞句には対格が用いられている。

（50）a. Yengi-ka　Seoul-{ey/ lo}　*ka-ss-ta.*
ヨンイ－主格　ソウル－{位格/向格}　行く－過去－断定　‘ヨンイがソウルに行った。’

b. Seoul-eyse　Chelswu-ka　*wa-ss-ta.*
ソウル－奪格　チョルス－主格　来る－過去－断定　‘ソウルからチョルスが来た。’

c. Chelswu-ka　celpyek-ul　*tha-ko*　*oll-a-ka-ss-ta.*
チョルス－主格　絶壁－対格　伝う－接続　上がる－行く－過去－断定
‘チョルスが絶壁を伝って登っていった。’

（51）a. hayan　yenki-ka　hanul-{?*ey/ lo}　*oll-a-ss-ta.*
白い　煙－主格　空－{位格/向格}　上がる－過去－断定　‘白い煙が空に上がった。’

b. hanul-eyse　pi-ka　*wa-ss-ta.*
空－奪格　雨－主格　来る－過去－断定　‘空から雨が来た（降った)。’

c. pismwul-i　pyek-ul　*tha-ko*　*hul-e-nayli-ess-ta.*
雨水－主格　壁－対格　伝う－接続　流れる－降りる－過去－断定
‘雨水が壁を伝って流れ落ちた。’

実は, 動作主による移動事象に関して, 韓国語では他言語と若干異なる現象が見られる。（52a）のように, 着点名詞句に位格だけでなく, 対格も許容され, さらには位格と対格の組み合わせも可能な点である。対格名詞句については（52b）も見られたい。この例は, インターネットのあるブログから取ったものである。この例では, *sankil-ul kata.* ‘山道を行く’の

ような経路ではなく, 着点を示しているにも関わらず, 対格が許されている。

（52）a. nay-ka　kongpwuha-le　tosekwan-{ey/ ul/ eyl}　*ka-ss*-nuntey....
私－主格　勉強する－ために　図書館－{位格 / 対格 / 位格＋対格}　行く－過去－だけど
‘勉強するために図書館に行ったのね, (そこで)…’

b. olaysman-uy　‘Seoul chwulcang’-iko,　Swunhyengi-ka　Seoul-ey
久しぶり－属格　ソウル出張－であり,　スンヒェンイ－主格　ソウル－位格
iss-ess-ki-ey…….　ches pihayngki-lo　Seoul-ul　*ka-ss*-supni-ta.
いる－過去－名詞化－位格　初　飛行機－道具　ソウル－対格　行く－過去－丁寧－断定
‘久しぶりの“ソウル出張”であり, (また) スンヒェンイがソウルにいたので…. 始発の飛行機に乗ってソウルに行きました。’

http://blog.chosun.com/kwonhi4801

また, 着点名詞句でも経路名詞句でもないが, 対格が用いられる例もある。（53）のように, ある特定の移動目的, とりわけ移動の大義名分を表すような抽象名詞句が用いられている場合である。この場合は, 位格はむしろ不適切である。ここから論理的に考えると, (52) と（53）の組み合わせも不可能ではないことが予測されよう。つまり, 目的地の場所とその移動の目的を表す抽象名詞句を両方とも用いると, **二重対格構文**が出来上がるということである。実際, 話し言葉では（54）のように二重対格も自然に成立する。

（53）Yengi-ka　yulep-ey　{yehayng/ chwulcang/ yuhak}-{ul/ *ey}　*ka-ss-ta.*
ヨンイ－主格　ヨーロッパ－位格　{旅行 / 出張 / 留学}－{対格 / ＊位格}　行く－過去－断定
‘ヨンイがヨーロッパに旅行に行った。’

（54）cey-ka　yo,　mikwuk-ul　(maliyeyo,)　chwulcang-ul　*ka-ss*-ketullang-yo.
私－主格　ですね,　米国－対格　（ですね, ）　出張－対格　行く－過去－ならば－丁寧
‘私がですね, アメリカに（ですね, ）出張に行きましたらばですね。’

さらに進んで, この二つの対格名詞句が, 意味的に統合したものが現れても不思議ではないだろう。その可能性は, (52a) の「位格＋対格」の語順で形態的合体がすでに実現されていることからも, 計り知れよう。（55）を見られたい。（55a）では「夫の実家に行く」という文字通りの意味解釈のみ可能であるが,「夫の実家」を対格で示した（55b）では,「嫁に行く」という慣用的な意味を表すことになる。これは, 単なる着点の場所と, ある特定の移動目的が認識された場所が合体したものと考えられる。つまり, 移動の目的として「結婚」が

あり, その結婚のためには, (韓国の伝統的な風習では) “花嫁が直接夫の家に向かって移動していく” からである。即ち, 対格が用いられると, その意味的効果として「移動目的」という意味要素が反映されるわけである[22)]。

(55) a. Yengi-ka　ecey　sicip-ey　*ka-ss-ta.*
ヨンイ－主格　昨日　夫の家－位格　行く－過去－断定
‘ヨンイが昨日, 夫の実家に行った。’
b. Yengi-ka　ecey　sicip-ul　*ka-ss-ta.*
ヨンイ－主格　昨日　夫の家－対格　行く－過去－断定
直訳：‘ヨンイが昨日, 夫の家を行った。’ (昨日結婚した, という意味)

以上から, 次のような提案ができる。(ｉ) 着点の「場所」に対する我々の認識には二つの理解が考えられる。単なる移動の着点として認識される場合の場所と, 移動目的が認識される場合の場所である。(ii) 韓国語では, 前者には位格が対応し, 後者には対格が対応する。

4. 非規範的構文とスキーマ

前節では, 規範的構文の随所に非規範的な構文パターンが観察されることがわかった。本節では, 第2節の提案に基づいてこれらの構文パターンがどのような述語タイプやスキーマに支えられ形成されているか, という観点から, 特に「存在物の成り立ち」に注目して分析する。

4.1 非意図的事象の他動詞構文

Lakoff (1977), H & TH (1980), ヤコブセン (1989) などが提案した他動性のプロトタイプ的アプローチによれば, 他動性は連続的なものであり, そのスケールの上で (他動性の高低を決定する意味要素の) 動作主性や意志性が高ければ他動詞文と, 低ければ自動詞文と親和性をもつとされる。これに基づくと, 非意図的事象が他動詞構文としてコード化される場合には, 何らかの説明が説明を与えなければならないということになろう。さらにIkegami (1991) の DO-language 対 BECOME-language, HAVE-language 対 BE-language の類型から見ても, これは説明が要求されるものであろう。というのは, Ikegami によれば, 日本

22) ヤコブセン (1989: 223) によれば, 日本語の「廊下を走る」と「廊下で走る」では前者のほうがその場所を「全面的に」移動するという意味を表している。これは, 他動性の原型における「動作主が対象物を完全に支配する」という意味要素が多少なりとも反映されているからと説明される。

語は BECOME-language であり , BE-language に属するとされるが, 非意図的事象に関しては Ikegami の分類と異なり , 他動性が低いにもかかわらず, 他動詞表現を好むためである。そこで Ikegami（1982）は, 日英対照の観点から, その動機付けを「責任」概念に求め, 説明を試みている（Hinds 1986 , Nishimura 1993 , Nishimitsu 2002 , パルデシ 2007 も参照）。

一方, 鄭（2009）は「責任」説を批判して, 日本語の非意図的他動詞構文はその共通の意味基盤として HAVE スキーマ, より具体的には「所有と損失」スキーマを有しており , これによりこの構文が成立していると主張した。鄭によれば,「責任」概念はこの「所有と損失」スキーマから語用論的推論によって派生的に解釈されたものとなる。

本節では, 韓国語でも日本語と同様の **HAVE スキーマ**に基づく共通の意味基盤を取り出すことができるということを見ていく。具体的な分析の前に, 第2節の HAVE スキーマを再掲しておく。HAVE に至るまでの「存在物の成り立ち」に注目すると , 次の四つのスキーマが想定できる。以下で順に見ていく。

（56）HAVE スキーマ：　$HAVE_1$：（$MAKE_1$ *x, y* ⇒）HAVE *x, y*　（創作者所有）
$HAVE_2$：（GET_1 *z, y* ⇒）HAVE *z, y*　（能動的所有）
$HAVE_3$：（GET_2 *z, y* ⇒）HAVE *z, y*　（受動的所有）
$HAVE_4$：（$BECOME_{1/2}$ *y* ⇒）（GET_2 *y, y'* ⇒）HAVE *y, y'*
（受動的自己所有：誕生）

創作者所有（$HAVE_1$）から損失へ

（57）Kimssi-nun　olhay　ci-un　nongsa-lul　ta　*mangchi-ess-ta.*
金氏-主題　今年　作る-過去・連体形　農事-対格　すべて　だめにする-過去-断定
‘金氏は今年栽培した農作物をすべて台無しにした。’

スキーマ 1:　（MAKE *x, y* ⇒）HAVE *x, y* ― ～ HAVE *x, y*（= Lose *x, y*）

能動的・受動的所有（$HAVE_2$, $HAVE_3$）から損失へ

（58）a. Yengi-ka　hakkyo-eyse　ecey　sa-n　cikap-ul　*ilh-ess-ta.*
ヨンイ-主格　学校-場所　昨日　買う-過去・連体形　財布-対格　失くす-過去-断定
‘ヨンイが学校で昨日買った（ばかりの）財布をなくした。’

b. Yengi-ka　ecey　oywu-n　swuhakkongsik-lul　*ilc-e-mek-ess-ta.*
ヨンイ-主格　昨日　覚える-過去・連体形　数学公式-対格　忘れる-食べる-過去-断定
‘ヨンイが昨日覚えた（ばかりの）数学の公式を忘れてしまった。’

c. namcachinkwu-eykey senmwul pat-un panci-lul *ilh-ess-ta.*
男友達-与格　プレゼント　もらう-過去・連体形　指輪-対格　失くす-過去-断定
‘彼氏にプレゼントとしてもらった指輪をなくした。’

（59）a. ta cap-un mwulkoki-lul （son-eyse） *nohchi-ess-ta.*
全て　掴む-過去・連体　魚-対格　（手-奪格）　逃す-過去-断定
‘ほぼ手に入れた魚を（手から）逃した。’

b. ta iki-n sihap-eyse Lotte-ka wusung-ul *nohchi-ess-ta.*
全て　勝つ-過去・連体形　試合-で　ロッテ-主格　優勝-対格　逃す-過去-断定
‘ほぼものにした試合で, ロッテが優勝を逃した。’

スキーマ2:　（GET *z, y* ⇒）HAVE *z, y* ― ～ HAVE *z, y*（= Lose *z, y*）

上記の *mangchita* ‘駄目にする’ , *ilhta* ‘失う’ , ‘失くす’ , *icta* ‘忘れる’ , *nohchita* ‘逃す’ などは, 語彙的意味の中に非意図性が含まれている動詞である。また, これらの他動詞には対応する自動詞もない。つまり, 上記の語彙的タイプ（非意図的他動詞）は元々他動詞の構文を基盤にして成立していると考えられる。

このような語彙的タイプから, どこまでその構文が拡張して, 上記のスキーマが維持できるかは言語によって異なっていても不思議ではないだろう。Pardeshi（2002）によると, インドの諸言語では非常に狭い範囲だけ許されるようであるが[23], 韓国語ではその許容範囲は非常に広く, 日本語ともほぼ一致する（吉成・パルデシ・鄭2007 , 2010。深見1997も参照）。例えば, インドの諸言語と異なり, 韓国語では（60）の状態変化・位置変化の他動詞（CAUSE タイプ）や, さらには下記の（62-64）の GET_2 に属する動詞（GET タイプ）も非意図的な解釈を許す（3.2節も参照）。これらの他動詞は, 語彙そのものには非意図性が含意されておらず, 構文全体で上記の非意図的他動詞と同じスキーマを表した時に, はじめて非意図性の意味が発生するものである。即ち, 自分に属しているもの, つまり, 自分の領域内にあり, かつ自分の管理の中にあるものを失う, といった意味が含意されると, 非意図的な文として理解されるのである。

（60）a. kil-ul ka-taka cikap-ul *ttulettuli-ess-ta.*
道-対格　行く-途中　財布-対格　落とす-過去-断定

23）例えば, マラーティー語では「宿題を忘れた」や「財布をなくした」のような語彙タイプは可能であるが,「うっかり皿を割った」のような CAUSE タイプや, さらに「足を折った」のような誕生による受動的自己所有の $HAVE_4$ タイプは, 他動詞節としてのコード化は許容されないようである。

‘道の途中で（もっていた）財布を落とした。’

b. topak-ul　ha-taka　kac-ko iss-ten　cen　caysan-ul　*nalli-ess-ta.*
賭博－対格　する－途中　もつ－ている－回想　全　財産－対格　飛ばす－過去－断定
‘ばくちをしてもっていた全財産を飛ばした。’

c. palam-ey　moca-lul　*nalli-ess-ta.*
風－原因　帽子－対格　飛ばす－過去－断定
‘風で（被っていた）帽子を飛ばした。’

d. chinkwu-eykey　*pilli-n*　cepsi-lul　*kkay-ss-ta.*
友達－与格　借りる－過去・連体形　皿－対格　割る－過去－断定
‘友達から借りた皿を割った。’

受動的自己所有（HAVE$_4$）から損失へ

（61）a. *tali-lul tachi-ess-ta.* ‘足を怪我した（折った）’ / *phi-lul hulli-ess-ta.* ‘血を流した’ /*kwuy-lul mek-ess-ta*. 直訳：‘耳を食べた’（聴力を失って聞こえない）, *etc*
（譲渡不可能な所有）

b. Kim ssi-nun　6.25　cencayng　ttay　two　atul-ul　*ilh-ess-ta.*（譲渡不可能な所有関係）
金　氏－TOP　6.25　戦争　時　二人　息子－対格　なくす－過去－断定
‘金氏は6.25戦争のとき, 二人の息子をなくした。’

スキーマ3：（BECOME$_{1/2}$ *y* ⇒）（GET$_2$ *y, y’*⇒）HAVE *y, y’* ― ～ HAVE *y, y’*（= Lose *y, y’*）
スキーマ3’：（BECOME$_{1/2}$ *y* ⇒）（GET$_2$ *z, y* ⇒）HAVE *z, y* ― ～ HAVE *z, y*（= Lose *z, y*）
（ただし, *z* は「金氏」）

（61a）は自分に帰属している譲渡不可能な所有物の損失を通して,（61b）はその延長の親族関係（息子）を失うことによって, 非意図性の意味が発生する。

受動的所有（HAVE$_3$）から損失へ, 被害へ

（62）a. uysa-ka　hwanca-eykey　kamki-lul　*olm-ass-ta.*
医者－主格　患者－与格　風邪－対格　移る－過去－断定
直訳：‘医者が患者に風邪を移った。’（患者から風邪をもらった）

b. ku　salam-i　thahyang-eyse　cwuk-ul　pyeng-ul　*et-ess-ta.*
その　人－主格　他郷－場所　死ぬ－未来・連体形　病－対格　得る－過去－断定
‘あの人は異郷で不治の病をもらった（病にかかった）。’

c. etten　namca-ka　kil-eyse　meli-ey　chong-ul　*mac-a,*　*cwuk-ess-ta.*
ある　男－主格　道－場所　頭－位格　銃－を　当たる－て　死ぬ－過去－断定
直訳：‘ある男が道で頭に銃を当たって死んだ。’（頭に弾丸を受けて死んだ）

（63）a. Kim　pwucang-i　swulcip　akassi-eykey　pakaci-lul　*sse-ss-ta.*
金　部長－主格　酒屋　娘－与格　ひさご－対格　かぶる－過去－断定
直訳：‘父が酒屋のウェイトレスにひさごをかぶった。’（ぼられた）

b. Yengi-nun　onul-to　emeni-eykey　cansoli-lul　*tul-ess-ta.*
ヨンイ－主題　今日－も　母親－与格　小言－対格　聞く－過去－断定
直訳：‘ヨンイは今日も母親に小言を聞いた。’（小言を言われた）

ku　pokse-nun　tocenca-eykey　yephkwuli-lul　hanpang　*mek-ess-ta.*
その　ボクサー－主題　挑戦者－与格　脇－対格　一発　食べる－過去－断定
直訳：‘そのボクサーは挑戦者に脇を一発食らった。’（殴られた）

スキーマ4：～ HAVE *z, y*　—（GET_2 ⇒）HAVE *z, y*　→　～ HAVE *z, y'*（= Lose *z, y'*）
（ただし, *y'* ⊂ *z*, *y'* ≠ *y*。“→”は, 左側の事象から推論される語用論的解釈を表す）

ここの受動的所有（$HAVE_3$）は, 上記のタイプと異なり,「損失」の意味が**語用論的推論**によって解釈される。例えば,（62a）の医者は風邪の菌が自分に属していない状態（～ HAVE *z, y*）から, 患者からそれをもらって自分に帰属する状態（（GET_2 ⇒）HAVE *z, y*）へと移行する。それにより「健康の損失」が推論され, 被害の意味まで含意するようになる。このとき解釈される「健康の損失」は「風邪」といった名詞句から語用論的に理解されるものである。

このような事態は, 典型的には *patta* ‘もらう’, *etta* ‘得る’ などの GET_2 に属する動詞とその構文パターンに依拠して表現される（3.3節参照）。従って, 意味的にも統語的にも受身構文と類似するが, 動詞はあくまでも能動形である。これらの非意図的構文が GIVE/GET タイプに依拠して表現されていることは,（64）を見られたい。

（64）a. *swumo-lul patta/ kwupak-ul patta/ phihay-lul ipta/ sonhay-lul pota/ wusum-ul sata*
直訳：‘受侮をもらう（侮辱を受ける）/ 驅迫をもらう（虐待を受ける）/ 被害を着る（被る）/ 損害を見る（損する）/ 笑いを買う（笑われる）’　（GET_2 タイプ）

b. *swumo-lul cwuta/ kwupak-ul cwuta/ phihay-lul cwuta*（*=iphita*）/ *sonhay-lul cwuta*（*=iphita*）/（*khun*）*wusum-ul cwuta*　（GIVE タイプ）

直訳：‘受侮を与える（侮辱する）/ 驅迫を与える（= 着せる）/ 被害を与える（= 着せる）/ 損害を与える（= 着せる）/（大きな）笑いを与える（大きく笑わせる）’

では, ここで, そもそも非意図的という意味はどこから理解されるのか, という疑問について考えたい。本稿の分析によれば, 非意図的事象に対する我々の理解は, 上記のようにHAVE スキーマを基本にした損失スキーマ（HAVE *p, q* ― ～ HAVE *p, q*（= *Lose p, q*））から理解されると結論される。その背後には, 自分に損害を与えることは, 普通自分自身が意図しては行わないという, 我々の共通認識が認知基盤としてあると考えられる[24]。

受動的自己所有（HAVE$_4$）の属性表現

（65）a. phwulu-n　nwun-ul　{*ha/ kaci*}-n　kunye
青い　目－対格　{する / もつ}－過去・連体形　彼女
‘青い目をしている彼女 / もっている彼女’

b. ki-n　tali-lul　{?*ha/ kaci*}-n　kunye
長い　足－対格　{?する / もつ}－過去－連体形　彼女
‘長い足をしている彼女 / 長い足をもっている彼女’

上記の他動詞文は, 誕生による受動的自己所有（HAVE$_4$）を表すものなので, 本来は非意図的事象であるはずだが,「損失」や「被害」の意味はない。意味的にはむしろ属性を述べるものであり[25], 動詞は *kacita* ‘もつ’ と *hata* ‘する’ が（潜在的には）交替可能な形で現れる[26]。つまり, これらの表現も HAVE$_4$ スキーマを基盤にして形成されている。しかし, 最も落ち着きのいい表現は他動詞文よりも, 例えば *ku yeca-ka nwun-i phwuluta.* ‘Lit. 彼女が目が青い’ のような, BE タイプ（BE$_5$ スキーマ）の**二重主格構文**であろう（4.4節参照）。

---

24) E. Fromm（1976）は,「私は意図を持つは, 私は望む, を意味する（佐野 1977: 41）」と説いている。これに基づいて考えると, 自分に損害を与えることは, 私は望まない, よって私には意図がない, とされるであろう。

25) 日本語の「青い目をしている」文について, 影山（2003 , 2004）は, 統語的には軽動詞構文, 意味的には「身体属性文」と特徴付けている。

26) Google 検索（2008年5月31日）で使用頻度を調査してみると,「もつ」に対する「する」の割合は, *pwulun nwun* ‘青い目’ は842/2453 , *kin tali* ‘長い足’ は51/4526で,「もつ」の使用頻度が高い。また, *cohun meli* ‘良い頭’ は「する」の使用例がなく（0/1333）, 一方 *kin meli* ‘長い髪’ はむしろ「する」の方が多い（1032/763）。ちなみに日本語の場合は,「青い目」は14102/685 ,「長い足」は48/373である。「良い頭」の285/1518や「長い髪」の365/1004と比べてみても, 日本語の「青い目」は「する」の方が, 使用頻度が遥かに高い。

4.2 無生物主語の他動詞構文

韓国語では, 英語の *The key opened the door.* のような, 道具主語の他動詞文は不可能である。また「嵐が家を倒した」のような表現もあまり好まない。しかしながら, 韓国語で無生物主語の他動詞文が成立しないのではない。では, どのような述語タイプ（またはスキーマ）が無生物主語の他動詞文と関わりをもつのだろうか。以下の例から少なくとも3タイプが確認される。

まず,（66）では HAVE タイプの述語が,（67）では自然物の生成・出現を表す $BECOME_1$ タイプと意味的な対応関係をもつ他動詞（即ち, MAKE タイプ）がそれぞれ用いられている。とりわけ（67b, c）は, $BECOME_1$ に属する動詞の使役形であることがわかる。

（66）a. koltukhiwuy-nun　100 mg/ 100 g-uy　pithamin C-lul　*hamyuha*-ko iss-ta-ko ha-n-ta.
ゴールドキウィー－主題　－属格　ビタミンC－対格　含有する－ている－断定－という
‘ゴールドキウィーは100 mg/ 100 g のビタミン C を含有しているという。’

b. kamnamwu-ka　yelmay-lul　cwulengcwuleng　*tal-ko iss-ta.*
柿木－主格　果実－対格　ぞろぞろ　付ける－ている－断定
‘柿木が果実をぞろぞろとぶら下げている。’

（67）a. kamnamwu-ka　cwulengcwuleng　yelmay-lul　*mayc-ess-ta.*
柿木－主格　ぞろぞろ　果実－対格　実る－過去－断定
‘柿木がぞろぞろと果実を実った（実らせた）。’

b. peylanta-ey　iss-nun　senincang　hwapwun　seykay-ka　hwalccak
ベランダ－位格　ある　サボテン　植木鉢　三つ－主格　すっかり
kkoch-ul　*phi-wu-ess-ta.*
花－対格　咲く－使役－過去－断定
‘ベランダのサボテンの植木鉢が三つともすっかり花を咲かせた。’

c. komok-un　casin-uy　soksal-ul　thaywu-e　saylowun　ssak-ul　*thuy-wu-*
古木－主題　自分－属格　内の肉－対格　燃やして　新しい　芽－対格　出る－使役－
ki-to　ha-n-ta.
こと－も　する－現在－断定
‘古木は, 自分の中の肉を燃やし新芽を吹いたりする。’

http://www.kbs.co.kr/ 1 tv/sisa/kbsspecial/vod/ 1386945 _ 11686 .html

つまり（66）と（67）では, 用いられている動詞タイプは異なるにしても, 両者は共に全体 - 部分の関係を基盤にした **$HAVE_4$ スキーマ**に依拠した表現である。従って, 基本的には

$HAVE_4$スキーマ（誕生による受動的自己所有）に基づく構文であるといえるが, 前者と異なり, 後者はやや複雑である。即ち, 用いられている述語が$BECOME_1$に属する動詞の使役形であることから見ると,（67）は**$MAKE_1$に$HAVE_4$が合体したスキーマ**を基盤に形成された構文であるといえよう。本来ならば, このような自然現象は自分の身からおのずと出てきたもの（結果物）が自分に帰属することを表すものなので, BE_5スキーマ（自己生成的帰属）に依拠した表現がより適切であろう。しかし, その自然現象の結果物（$HAVE_4$）は, 自然物が自らの力でそれを外部に出現させたもの（$MAKE_1$）として捉えられ, 表現されている。（67）の文が「自己生成」の使役的意味と共に再帰的状況の両方の意味解釈を帯びるのも, この二つのスキーマの関与の現れに他ならないであろう。

また, 韓国語では, 英語の *The box has many toys in it.* ‘箱の中にはおもちゃがたくさんある’ のような, 分離可能な所有は不可能である。このことから, HAVE スキーマに基づく無生物主語の他動詞構文は, 韓国語では, 分離不可分な所有関係の$HAVE_4$スキーマ（$MAKE_1$と$HAVE_4$の合体も含む）に限定されるといえる。

次に（68）は上記と異なる。ここでは**自然物の自発的な移動**を表す$MOVE_2$に属する動詞が用いられ, 対格名詞句は自然物の移動によって覆われて行く経路を表している。（69）は（68）の拡張と見てよいだろう。許容される範囲は, ハリケーンのように自発的移動が可能でありかつ強力なパワーをもった自然物（**自然勢力**）から始まり, 飢饉やニュースのような抽象名詞にまで至っている。

（68）a. kwulum-i　tal-ul　*kali-ess-ta*.
雲－主格　月－対格　隠す－過去－断定　‘雲が月を隠した。’

b. tal-i　kwulum-ul　*pes-e-na*　sanneme-lo　salaci-ess-ta.
月－主格　雲－対格　脱ぐ－出る　山の向こう－向格　消える－過去－断定
‘月が雲から出てきて山の向こうへと消えた。’

（69）a. khalipuhay-lul ***hwuypssul***-ess-ten chokanglyek helikhein tin-i Mexico-ey sanglyukhayse Maya yucekci-lul *kangthahay-ss*-supnita.
‘カリブ海を襲った超強力ハリケーンディーンが, メキシコに上陸し, マヤ遺跡地を強打しました（襲った）。’
http://imnews.imbc.com/replay/nwtoday/article/2060158_2711.html

b. …sangsang-ul chowelha-nun kikun-i pwukhan-ul ***hwypssul***-ess-ta.
‘想像を超える飢饉が北朝鮮を襲った（北朝鮮全域に広まった）。’
http://world.kbs.co.kr/korean/news/special/nkorea_nuclear/general_02d.htm

c. ecey ohwu-ey nantey epsi hwuypalyu kaps insang sosik-i tholontho-lul ***hwuypssul***-ess-ta.
‘昨日の午後予想もしていなかったガソリン価格の引き上げニュースがトロントを襲った（トロント全域に広まった）。’　http://alfee.egloos.com/649381

最後に,（70）は「爆発する」,「蒸発する」,「沈没する」のような BECOME 動詞が実質的な意味をもたず, 単なる機能動詞として働く *hata* ‘する’ を用いて**軽動詞構文**を作っている場合である（鄭2006: 91-94参照）。具体的には, BECOME タイプの自動詞が形だけの他動詞節を作っている事例である。他動性プロトタイプの観点から見ると, これは最も周辺的な事例と見なすことができよう（軽動詞構文については次節参照）。

（70）a. swulyuthan-i　phokpal-ul　*hay-ss-ta*.
手榴弾－主格　爆発－対格　する－過去－断定　直訳：‘手榴弾が爆発をした。’
b. swucungki-ka　cungpal-ul　*hay-ss-ta*.
水蒸気－主格　蒸発－対格　する－過去－断定　直訳：‘水蒸気が蒸発をした。’
c. pay-ka　chimmol-ul　*hay-ss-ta*.
船－主格　沈没－対格　する－過去－断定　直訳：‘船が沈没をした。’

4.3　同族目的語構文と軽動詞構文

3.4節で述べたように, ACT に属する自動詞の多くは, 同族目的語構文または軽動詞構文を作ることができる[27]。軽動詞構文として広く認められているのは, *hata* ‘する’ を用いたもの（「**DO 軽動詞構文**」と呼ぶ）であるが, 本稿では自動詞の名詞化に *cista* ‘作る’ を用いたものも軽動詞構文（「**MAKE 軽動詞構文**」と呼ぶ）として認める。それぞれの形成方法は図4と図5のようである。動詞の名詞化には, 動詞語幹に名詞化接辞 *-m/-um* を付ける「*m-* 名詞化」と, *-ki* を付ける「*ki-* 名詞化」の二つがある。前者は同族目的語構文と MAKE 軽動詞構文を作る際に用いられ, 後者は DO 軽動詞構文を作る際に現れる。よって, 同族目的語構文の作り方は DO 軽動詞構文よりも MAKE 軽動詞構文に似ているといえる。また名詞句編入が起こりうる点でも, 同族目的語構文と MAKE 軽動詞構文は類似する。それぞれの例は（71）と（72）を見られたい。

---

27) Jayaseelan（1988: 99）によると, 英語は同族目的語構文がそれほど生産的でなく, 数個の例を示すに過ぎないが, 言語によっては完全に生産的なものもある。例えば, Malayalam（南インド, ドラビダ語族）ではすべての自動詞が対応する同族目的語構文をもっているという。

図 4

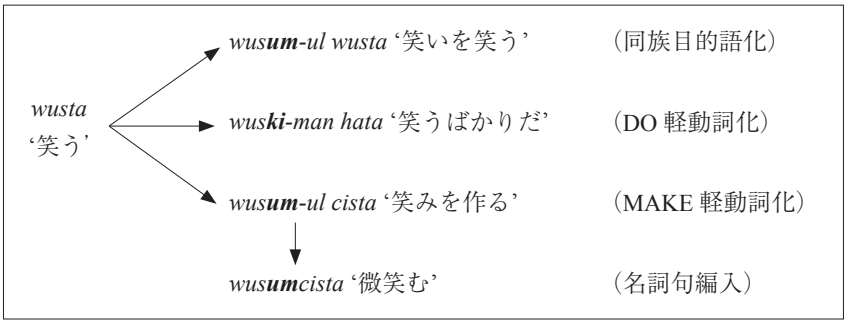

図 5

（71）a. aki-ka　sayloksaylok　*cako-iss-ta.*
赤ちゃん－主格　どんどん　寝る－ている－断定　‘赤ちゃんが深く寝ている。’

b. aki-ka　sayloksaylok　*cam-ul*　*ca-ko iss-ta.*（同族目的語化）
赤ちゃん－主格　どんどん　寝－対格　寝る－ている－断定
‘赤ちゃんが深く眠りを眠っている（眠りについている）。’

c. aki-ka　cikum　*camca-ko-iss-ta.*（名詞句編入）
赤ちゃん－主格　今　寝寝る－ている－断定　‘赤ちゃんが今眠っている。’

（72）a. kunye-nun　wenilinci　halwucongil　*wus-ess-ta.*
彼女－主題　なぜか　一日中　笑う－過去－断定
‘彼女はなぜか一日中笑った。’

b. kunye-nun　wenilinci　halwucongil　*wus-um-ul*　*wus-ess-ta.*（同族目的語化）
彼女－主題　なぜか　一日中　笑う－名詞化－対格　笑う－過去－断定
直訳：‘彼女はなぜか一日中笑いを笑った。’

c. kunye-nun　wenilinci　halwucongil　*wus-ki-man*　*hay-ss-ta.*（DO 軽動詞化）
彼女－主題　なぜか　一日中　笑う－名詞化－だけ　する－過去－断定
直訳：‘彼女はなぜか一日中笑うことばかりをした。’（笑うばかりだった）

d. kunye-nun　salccak　elkwul-ey　*wus-um-ul*　*ci-ess-ta.*（MAKE 軽動詞化）
　彼女－主題　そっと　顔－位格　笑み－対格　作る－過去－断定
　‘彼女はにっこり（と）顔に笑みを作った。’

e. salccak　*wusumcis-nun*　kunye-uy　elkwul　（名詞句編入）
　そっと　微笑む－現在・連体形　彼女－属格　顔
　‘にっこりと微笑む彼女の顔’

同族目的語構文と軽動詞構文の関係について, 次の見解を示すことができる。Jespesen（1949: 234）は同族目的語と結果目的語の類似性を指摘しており, Quirk et. al（1985: 750）や Givón（1984: 105-106）にも同様の指摘が見られる。Fillmore（2003 [1968]: 118-120）は, *dream a dream* のような同族目的語構文と *suggest, shove* のような一般他動詞構文を *make, take, have, give* などの代動詞（pro-V）構文と関連付けて[28], 両者間の規則的な対応関係を捉えようとしている。洪（1990: 159-164）は, 韓国語について, 同族目的語構文が軽動詞構文（彼の用語では, 機能動詞構文）の一種なのか, 軽動詞構文が同族目的語の一種なのか, という観点から議論を展開し, 前者の立場を支持している。本稿では, 両構文の形成方法（動詞の名詞化形や名詞句編入）を観察することで, 同族目的語構文は, 二つの軽動詞構文の中では MAKE 軽動詞構文と類似性が認められると示した。

以下では, どのような述語タイプ（またはスキーマ）がこれらの構文を形成しているか, という観点から考察する。韓国語を見ると,（10）の *kulim-ul kulita* ‘絵を描く’ や *ttwuykim-ul thwuykita* ‘揚げ物を揚げる’ のように, 他動詞の中では MAKE タイプの動詞が同族目的語構文を作っていることが確認される[29]。一方, 自動詞では（73）のように ACT タイプの動詞が同族目的語構文や DO 軽動詞構文を成立させていることがわかる。さらに（74）に見られるように,（74a）の同族目的語構文や（74b）の DO 軽動詞詞構文は MAKE タイプの動詞とも交替可能である。またその結果として, MAKE 軽動詞構文が成立することがわかる。

（73）a. ttwuyta/ ketta/ salta/ chwumchwuta/ kkwumkkwuta
　‘跳ぶ / 歩く / 生きる / 踊る / 夢見る’

b. *ttwuym-ul ttwuyta/ kelum-ul ketta/ salm-ul salta/ chwum-ul chwuta/ kkwum-ul kkwuta*
　直訳：‘跳びを跳ぶ / 歩きを歩く / 生きを生きる / 踊りを踊る / 夢を見る’

28）即ち, *dream a dream* と *have a dream*, *suggest* と *make a suggestion*, *shove someone* と *give some a shove* のような対応関係が見られる。

29）より多くの例は, 洪（1990）を参照されたい。

c. *ttwuymttwuyki-lul hata/ talliki-lul hata/ halwucongil ketki-man hata*
直訳：‘跳び跳びをする / 走りをする / 一日中歩きばかり（を）する’

（74）a. *hanswum-ul swuy-ko iss-ta.*
直訳：‘ため息を吸っている。’

hanswum(-ul) cis-ko iss-ta.
直訳：‘ため息を作っている。’（ため息をしている）

b. *isanghan phyoceng-ul ha-ko iss-ta.*
‘変な表情をしている。’

isanghan phyoceng-ul cis-ko-iss-ta.
直訳：‘変な表情を作っている。’

c. *elkwul-ey miso-lul ttuy-ko iss-ta.*
‘顔に微笑を浮かべている。’

hwanhan miso(-lul) cis-ko iss-ta.
直訳：‘微笑を作っている。’（微笑んでいる）

以上をまとめてみよう。（ｉ）自動詞が作る同族目的語構文や二つの軽動詞構文は, Givón（1984）の指摘とおり, 典型的な他動詞構文から離れた周辺的な事例である。（ii）同属目的語構文や軽動詞構文を許す場合の MAKE タイプと ACT タイプの動詞は, **$MAKE_1$ スキーマ**によって互いに結びついている（注4も参照）。ただし, ACT タイプが作っている $MAKE_1$ スキーマは, 元来参与者が一人しかいない状況なので, $HAVE_4$ あるいは BE_5（自己生成的帰属）の制約を受けることになり, その結果物は自動的に創作者（動作主）に帰属されるものとなる。

4.4　与格－主格構文と二重主格構文と二重対格構文

本節では, 与格－主格構文と二重主格構文, そして二重対格構文の成立を本稿で提案した記述枠組みを用いて考察する。個々の動詞に目を向けると, これらの構文に生起する動詞は様々でその分布は捉えにくいように思われる。しかし, 本稿のように「存在物の成り立ち」を考慮した上で, 上位カテゴリーの述語タイプとそのスキーマを認めると, 与格－主格構文と二重主格構文には主に（75）の二つのスキーマが関与し, 二重対格構文には（76）の三つのスキーマが関与することがわかる[30]。

（75）a. GET スキーマ：　GET_1：HAVE *x, y* ― ACT ON *z, y* ― MOVE *y, z* ― BE *y, z* ―
HAVE *z, y*　（能動的な所有物移動：第一動作主＝主語）
GET_2：HAVE *x, y* ― ACT ON *x, y* ― MOVE *y, z* ― BE *y, z* ―
（=receive）HAVE *z, y*　（受動的な所有物移動：第一動作主≠主語）

30）本稿と異なるアプローチとして, Yang（1972）, 任（1972）, 任（1974）などを見られたい。Yang は二重主格構文に見られる二つの名詞句の意味関係に着目して,「大小関係説」を唱えている。一方, 任は格助詞 *-i/-ka* および *ul/lul* の機能に注目し, それらが規範的構文の格助詞の機能と異なることから, 主格のみならず対格にも主題化の機能があるという「主題化説」を唱えている。

b. BE スキーマ：　BE_3：(GET_1 *z, y* ⇒) BE *y, z*　（能動的な所有物移動による帰属）
BE_4：(GET_2 *z, y* ⇒) BE *y, z*　（受動的な所有物移動による帰属）
BE_5：($BECOME_{1/2}$ *y* ⇒) (GET_2 *y, y'* ⇒) BE *y', y*　（自己生成的帰属）

（76）a. GIVE スキーマ：　HAVE *x, y* ― ACT ON *x, y* ― MOVE *y, z* ― BE *y, z* ― HAVE *z, y*
（能動的な所有物移動：第一動作主＝主語）

b. ACT ON $_1$ スキーマ：ACT ON *x, y*　（$x \neq y$：活動・接触・打撃）

c. HAVE スキーマ：　$HAVE_2$：(GET_1 *z, y* ⇒) HAVE *z, y*　（能動的所有）
$HAVE_3$：(GET_2 *z, y* ⇒) HAVE *z, y*　（受動的所有）
$HAVE_4$：($BECOME_{1/2}$ *y* ⇒) (GET_2 *y, y'* ⇒) HAVE *y, y'*
（受動的な自己所有：誕生）

分析の前に与格 - 主格構文・二重主格構文と二重対格構文について, 次の2点に注目されたい。（ｉ）この三構文が描写している事象を正確に把握するには, 対象物の「存在物の成り立ち」に関する理解が不可欠である。（ii）そこには, 大きく分けると, GIVE/GET スキーマを経て BE_3/BE_4 または $HAVE_2$/$HAVE_3$ が関与するものと, 譲渡不可能な所有関係の BE_5/$HAVE_4$ スキーマが関与するするものの二つがある。従って, 上記の三構文は **BE スキーマ**と**HAVE スキーマ**を基盤にして形成される構文であるという分析ができる。

所有物移動を経て自己帰属へ：与格 / 位格－主格構文と二重主格構文

Ａ．与格－主格構文と二重主格構文（Ⅰ）

（77）a. Yengi-*eykey*-nun,　ton-*i*　*manhta.*
ヨンイ－与格－主題　金－主格　多い　‘ヨンイには金がたくさんある。’

b. Yengi-***ka***,　ton-***i***　*manhta.*
ヨンイ－主格　金－主格　多い　‘ヨンイは金がたくさんある。’

スキーマ１：～ BE *y, z* ―(GET_1 / GET_2 ⇒) BE *y, z*

Ｂ．与格－位格－主格構文と主格－位格－主格構文（Ⅱ）

（78）a. Yengi-*eykey,*　mom-*ey*　ttay-*ka*　*manhta.*
ヨンイ－与格　体－位格　垢－主格　多い
‘ヨンイには, 体に垢が多い。’

b. Yengi-***ka***,　mom-*ey*　ttay-***ka***　*manhta.*
ヨンイ－主格　体－位格　垢－主格　多い　‘ヨンイは体に垢が多い。’

C．ゼロ/属格－位格－主格構文とゼロ/属格－主格－主格構文と主格－位格－主格構文（Ⅲ）

（79）a. Yengi（*-uy*）　mom-*ey,*　ttay-*ka*　*manhta.*
ヨンイ（－属格）体－位格　垢－主格　多い　‘ヨンイの体には垢が多い。’

b. Yengi（*-uy*）　mom-***i,***　ttay-***ka***　*manhta.*
ヨンイ（－属格）体－主格　垢－主格　多い　‘ヨンイの体は垢が多い。’

c. Yengi-***ka,***　mom-*ey*　ttay-***ka***　*manhta.*（= 78b）
ヨンイ－主格　体－位格　垢－主格　多い　‘ヨンイは, 体に垢が多い。’

スキーマ1’：～ BE *y, z*　―（GET_2 ⇒）BE *y, z*
（ただし, *z* は「ヨンイの体」または「ヨンイ」）

D．与格－主格構文と二重主格構文（Ⅳ）

（80）a. na-*eykey*-nun,　cikum　ton-*i*　*philyo-hata.*
私－与格－主題　今　金－主格　必要－する　‘私には今金が必要だ。’

b. nay-***ka***,　cikum　ton-***i***　*philyo-hata.*
私－主格　今　金－主格　必要－する　‘私は今金が必要だ。’

スキーマ1”: ～ BE *y, z* ― [*pw*（GET_1 / GET_2 ⇒）BE *y, z*]（ただし, *pw* は可能世界）

所有物移動を経て脱自己帰属へ：　位格-主格構文と二重主格構文

A．位格（起点）－主格構文と二重主格構文（Ⅰ）

（81）a. ceswuci-*ey*　mwul-*i*　*hull-e-nemchi-ess-ta.*
貯水池－位格　水－主格　流れる－溢れる－過去－断定
直訳：‘貯水池に（溜まっていた）水が（そこから）溢れ流れた。’
（貯水池の水が溢れ流れた。）

b. ceswuci-***ka,***　mwul-***i***　*hull-e-nemchi-ess-ta.*
貯水池－主格　水－主格　流れる－溢れる－過去－断定
‘貯水池は,（溜まっていた）水が（そこから）溢れ流れた。’

スキーマ2：（GET_2 ⇒）BE *y, z* ― MOVE *y* ― ～ BE *y, z*（= Lose *z, y*）

B．ゼロ/属格－位格（起点）－主格構文とゼロ/属格－主格－主格構文と主格－位格（起点）－主格構文（Ⅱ）

（82）a. Yengi（*-uy*）　os-*ey,*　tanchwu-***ka***　*tteleci-ess-ta.*
ヨンイ（－属格）服－位格　ボタン－主格　落ちた－過去－断定
直訳：‘ヨンイの服に（付いていた）ボタンが,（そこから）取れた。’
（ヨンイの服のボタンが取れた。）
（ヨンイが着ている服に, 付いていたボタンがそこから落ち, 現在その服に付いていない, という意味）

b. Yengi（*-uy*）　os-***i,***　tanchwu-***ka***　*tteleci-ess-ta.*
ヨンイ（－属格）服－主格　ボタン－主格　落ちた－過去－断定
‘ヨンイの服は,（付いていた）ボタンが（そこから）取れた。’
（ヨンイが着ている服は, 付いていたボタンがそこから落ち, 現在その服には付いていない, という意味）

c. Yengi-***ka***,　os-*ey*　tanchwu-***ka***　*tteleci-ess-ta.*
ヨンイ－主格　服－位格　ボタン－主格　落ちた－過去－断定
直訳：‘ヨンイは,（自分の着ている）服に（付いていた）ボタンが（そこから）取れた。’（ヨンイは服のボタンが取れた。）
（ヨンイは, 自分が着ている服に付いていたボタンがそこから落ち, 現在付いていない状態だ, という意味）

スキーマ2’：（$GET_2 \Rightarrow$）BE *y, z* ― MOVE *y* ― ～ BE *y, z*（= Loss *z, y*）
（ただし, *z* は「ヨンイの服」または「ヨンイ」）

上記の（81a）と（82a）の文は, 語順を変えると全く別の構文になってしまうので, 注意されたい。（83）のように, 位格名詞句が主格名詞句の後にくると, 起点の解釈はできなくなり, 着点としてしか理解されない。この場合は動詞も,（81）では複合動詞として理解されるが,（83a）では単なる動詞の連続として理解される。つまり, 動詞が単に連続する場合は, 二つの動詞の間にポーズを入れることができ, 位格名詞句は起点ではなく着点の意味を担う構文となる。なおこの語順の場合は,（84）に見られるように二重主格構文も作れない。従って,（81a）と（82a）は位格名詞句の「貯水池」や「ヨンイの服」の現在の状態について述べる文であり, それと同時に,「ヨンイの服」（ヨンイが着ている服）は「ヨンイ」について述べることでもあるので, この二つの解釈可能性が, それぞれの主格への交替を可能にさせると考えられる。

（83）a. mwul-*i*,　ceswuci-*ey*　*hull-e*　*nemchi-ess-ta.*
水－主格　貯水池－位格　流れる　溢れる－過去－断定
‘水が, 貯水池に流れてきて（そこから）溢れた。’

b. tanchwu-*ka,*　Yengi（-*uy*）　os-*ey*　*tteleci-ess-ta.*
ボタン－主格　ヨンイ（－属格）服－位格　落ちた－過去－断定
‘ボタンが, ヨンイの服に落ちた。’

（84）a. ?*mwul-i,　ceswuci-***ka***　*hull-e*　*nemchi-ess-ta.*
水－主格　貯水池－主格　流れる　溢れる－過去－断定
直訳：‘水が, 貯水池が流れて溢れた。’

b. *tanchwu-***ka**,　Yengi（-*uy*）　os-***i***　*tteleci-ess-ta.*
ボタン－主格　ヨンイ（－属格）服－主格　落ちた－過去－断定
直訳：‘ボタンが, ヨンイの服が落ちた。’

よって,（81-82）は文頭の「貯水池」や「ヨンイ」を中心語（head）とする関係節（85）を作ることができる。一方, 文頭に来ない移動物の「水」や「ボタン」を中心語とする関係節（86）は,（81-82）とは意味的に平行するものではない。

（85）a. mwul-*i*　*hull-e-nemchi-n*　ceswuci
水－主格　流れる－溢れる－過去・連体形　貯水池
‘水が（そこから）溢れ流れた貯水池’

b. os-*ey*　tanchwu-*ka*　*tteleci-n*　Yengi
服－位格　ボタン－主格　落ちた－過去・連体形　ヨンイ
直訳：‘服にボタンが落ちたヨンイ’
意図：‘（着ている）服のボタンが取れたヨンイ’

（86）a. #ceswuci-*ey*　*hull-e*　*nemchi-n*　mwul.
貯水池－位格　流れる　溢れる－過去・連体形　水
‘貯水池に流れ, 溢れた水’

b. #Yengi（-uy）　os-*ey*　*tteleci-n*　tanchwu
ヨンイ（－主格）服－位格　落ちる－過去・連体形　ボタン
‘ヨンイの服に（上から）落ちたボタン’

以上から,（81a）と（82a）は, 単なる位格（起点）構文ではないことが理解されるであ

ろう。位格の代わりに奪格を用いると, 位格名詞句の現在の状態について述べるという意味的制約がなくなるため,（87）のような語順の入れ替えが自由になる。

（87）a. Yengi（*-uy*）　***os-eyse***　tanchwu-*ka*　*tteleci-ess-ta.*
ヨンイ（－属格）服－奪格　ボタン－主格　落ちる－過去－断定
‘ヨンイの服からボタンが（下に）落ちた。’
b. tanchwu-*ka*　Yengi（*-uy*）　***os-eyse***　*tteleci-ess-ta.*
ボタン－主格　ヨンイ（－属格）服－奪格　落ちる－過去－断定
‘ボタンがヨンイの服から（下に）落ちた。’

ちなみに（82）の構文は,（82b）や（82c）の構文パターンから予測されるように, **多重主格構文**も許す。同様の特徴は（79）にも見られる。それぞれ（88）を参照されたい。意味的には（88a）のように,「ヨンイが着ている服」の現在の状態について述べることが, 即ち「ヨンイ」の現在の状態について述べることである, という両方の解釈が得られる場合である。

（88）a. Yengi-***ka***,　os-***i***,　tanchwu-***ka***　*tteleci-ess-ta.*
ヨンイ－主格　服－主格　ボタン－主格　落ちた－過去－断定
直訳：‘ヨンイが,（着ている）服が,（そこに付いている）ボタンが取れた。
‘ヨンイは服のボタンが取れている／ヨンイの服はボタンが取れている。’
b. Yengi-***ka***,　mom-***i***　ttay-***ka***　*manhta.*
ヨンイ－主格　体－主格　垢－主格　多い
‘ヨンイは体に垢が多い／ヨンイの体は垢が多い。’

譲渡不可能な所有とその延長：二重主格構文と多重主格構文

A．与格－主格構文と二重主格構文（Ⅰ）

（89）a. Chelswu-*eykey*-nun,　coh-un　meli-*ka*　*iss-ta.*（身体の属性）
チョルス－与格－主題　良い－現在・連体形　頭－主格　ある－断定
‘チョスルには, 良い頭がある。’
b. Chelswu-***ka***,　meli-***ka***　*coh-ta.*
チョルス－主格　頭－主格　ある－断定　‘チョスルは, 頭が良い。’

スキーマ3：（BECOME$_{1/2}$ y ⇒）（GET$_2$ y, y'⇒）BE y', y

B．与格－主格－主格構文と多重主格構文（Ⅱ）

（90）a. Chelswu-*eykey*-nun　hyengcey-***ka***　seys（-***i***）　*iss-ta.*（親族の外延量）
チョルス－与格－主題　兄弟－主格　三つ（－主格）いる－断定
‘チョスルには兄弟が三人いる。’

b. Chelswu-***ka,***　hyengcey-***ka***　seys-***i***　*iss-ta.*
チョルス－主格　兄弟－主格　三つ－主格　いる－断定
‘チョスルは兄弟が三人いる。’

スキーマ3’：～ BE *y, z* ―（BECOME$_{1/2}$ *y* ⇒）（GET$_2$ *z, y* ⇒）BE *y, z*
（ただし, *z* は「チョルス」）

C．ゼロ/属格－主格－主格構文と多重主格構文（Ⅲ）

（91）a. Chelswu ssi（-*uy*）　pwuin-***i***　pyeng-***i***　*na-ss-ta.*（親族の一時的属性）
チョルス氏（－属格）婦人－主格　病－主格　出る－過去－断定
‘チョルス氏の奥さんは, 病気になった。’

b. Chelswu ssi-***ka***　pwuin-***i***　pyeng-***i***　*na-ss-ta.*
チョルス氏－主格　婦人－主格　病－主格　出る－過去－断定
‘チョルス氏は奥さんが病気になった。’

スキーマ3”：（GET$_1$ *x, z* ⇒）BE *z, x* ― ～ BE *y, z* ―（GET$_2$ *z, y* ⇒）BE *y, z*
（ただし, *z* は「*x* の奥さん」）

所有物移動を経て他者所有へ：二重対格構文

A．与格（着点）－対格構文・二重対格構文（Ⅰ）

（92）a. nay-ka　Chelswu-*eykey*,　ton-*ul*　com　*cwu-ess-ta.*
私－主格　チョルス－与格　金－対格　少し　やる－過去－断定
‘私はチョルスに金を少しやった。’

b. nay-ka　Chelswu-***lul***,　ton-***ul***　com　*cwu-ess-ta.*
私－主格　チョルス－対格　金－対格　少し　やる－過去－断定
‘私はチョルスに金を少しやった。’

スキーマ4：HAVE *x, y* ― ACT ON *x, y* ― MOVE *y, z* ― BE *y, z* ―

（GET_2 ⇒）HAVE *z, y*

ただし, 所有物の移動先が人間でない場合は, 次のように二重対格が不自然になる。

（93）a. nay-ka　Chelswu　cip-ey,　ton-*ul*　com　*cwu-ess-ta.*
私－主格　チョルス　家－位格　金－対格　少し　やる－過去－断定
‘私はチョルスの家に金を少しやった。’

b. ??nay-ka　Chelswu　cip-***ul***,　ton-***ul***　com　*cwu-ess-ta.*
私－主格　チョルス 家－対格　金－対格　少し　やる－過去－断定
直訳：‘私はチョルスの家を金を少しやった。’

B．ゼロ/属格 - 位格（着点）- 対格構文と与格 - 位格（着点）- 対格構文と対格 - 位格（着点）- 対格構文（Ⅱ）

（94）a. emeni-ka　Yengi（*-uy*）　son-*ey*,　panci-*lul*　*kkiwu-e-cwu-ess-ta.*
母親－主格　ヨンイ（－属格）　手－位格　指－対格　嵌める－やる－過去－断定
‘母親がヨンイの指に, 指輪を嵌めてやった。’

b. emeni-ka　Yengi-*eykey*,　son-*ey*　panci-*lul*　*kkiwu-e-cwu-ess-ta.*
母親－主格　ヨンイ－与格　手－位格　指輪－対格　嵌める－やる－過去－断定
‘母親がヨンイに, 指に指輪を嵌めてやった。’

c. emeni-ka　Yengi-***lul***,　son-*ey*　panci-***lul***　*kkiwu-e-cwu-ess-ta.*
母親－主格　ヨンイ－対格　手－位格　指輪－対格　嵌める－やる－過去－断定
‘母親がヨンイに, 指に指輪を嵌めてやった。’

スキーマ4：HAVE *x, y* ― ACT ON *x, y* ― MOVE *y, z* ― BE *y, z* ―（GET_2 ⇒）HAVE *z, y*
（ただし, *z* は「ヨンイの指」または「ヨンイ」）

所有物移動を経て脱他者所有へ：二重対格構文

A．ゼロ/属格－位格（起点）－対格構文と与格－位格（起点）－対格構文と対格－位格（起点）－対格構文（Ⅰ）

（95）a. emeni-ka,　Yengi（*-uy*）　mom-*ey*　ttay-*lul*　*peski-e-cwu-ess-ta.*
母親－主格　ヨンイ（－属格）　体－位格　垢－対格　脱がす－やる－過去－断定
直訳：‘母親が, ヨンイの体に（付いている）垢を（そこから）擦り取ってやった。’
（母親がヨンイの体の垢を擦り取ってやった。）

b. emeni-ka　Yengi-*eykey,*（mom-*ey*）　ttay-*lul*　*peski-e-cwu-ess-ta.*
母親－主格　ヨンイ－与格（体－位格）　垢－対格　脱がす－過去－断定
‘母親がヨンイに,（体に付いている）垢を（そこから）擦り取ってやった。’

c. emeni-ka　Yengi-***lul***,　（mom-*ey*）　ttay-***lul***　*peski-e-cwu-ess-ta.*
母親－主格　ヨンイ－対格　（体－位格）　垢－対格　脱がす－過去－断定
直訳：‘母親がヨンイを,（体に付いている）垢を（そこから）擦り取ってやった。’

スキーマ5：（$GET_2 \Rightarrow$）HAVE *z, y* — ACT ON *x, y* — MOVE *y* — ～ BE *y, z* — ～ HAVE *z, y*
（ただし, *z* は「ヨンイの体」または「ヨンイ」）

譲渡不可能な所有とその延長：二重対格構文

A．ゼロ/属格 - 対格構文と二重対格構文（Ⅰ）

（96）a. Chelswu-ka　ay（-*uy*）　meli-*lul*,　*ttayli-ess-ta.*（身体部分）
チョルス－主格　子供（－属格）頭－対格　殴った－過去－断定
‘チョルスが子供の頭を殴った。’

b. Chelswu-ka　ay-***lul,***　meli-***lul***　*ttayli-ess-ta.*
チョルス－主格　子供－対格　頭－対格　殴った－過去－断定
‘チョルスが子供を, その頭を殴った。’

スキーマ6：ACT ON *x, y'* ∈ ACT ON *x, y*
（ただし, *y'* は［（$BECOME_{1/2}$ *y* ⇒）（GET_2 *y, y'* ⇒）HAVE *y, y'*］の履歴をもつもの）

B．ゼロ/属格－対格構文と二重対格構文（Ⅱ）

（97）a. Chelswu-ka,　Yengi（-*uy*）　apeci-*lul*　*mohamhay-ess-ta.*（親族関係）
チョルス－主格　ヨンイ（－属格）父－対格　謀陥する－過去－断定
‘チョルスがヨンイの父親を誹謗中傷して困窮に陥れた。’

b. Chelswu-ka　Yengi-***lul,***　apeci-***lul***　*mohamhay-ess-ta.*
チョルス－主格　ヨンイ－対格　父－対格　謀陥する－過去－断定
直訳：‘チョルスがヨンイを, 父親を誹謗中傷して困窮に陥れた。’
‘チョルスがヨンイの父親を誹謗中傷して困窮に陥れた。’

スキーマ6’：ACT ON *x, y* ⊆ ACT ON *x, z*

（ただし, *y* は「*z* の父」であり, [（BECOME$_{1/2}$ *z* ⇒）（GET$_2$ *z, y* ⇒）HAVE *z, y*] の履歴をもつもの）

C．ゼロ/属格－対格構文と二重対格構文（Ⅲ）

（98）a. Chelswu-ka, emma（*-uy*） chima-*lul* *cap-a-tangki-ess-ta.*（身体部分からの延長）
チョルス－主格　母（－属格）スカート－対格　掴む－引っ張る－過去－断定
‘チョルスが母親の（履いている）カートを掴んで引っ張った。’

b. Chelswu-ka emma-***lul***, chima-***lul*** *cap-a-tangki-ess-ta.*
チョルス－主格　母－対格　スカート－対格　掴む－引っ張る－過去－断定
直訳：‘チョルスが母親を,（履いている）スカートを掴んで引っ張った。’

スキーマ6”: ACT ON *x, y* ∈ ACT ON *x, z*
（ただし, *y* は「*z* が履いているスカート」であり, [（GET *z, y* ⇒）HAVE *z, y*] の履歴をもつもの）

その他

A．心理状態の一時的な帰属を表す心理述語の場合：二重主格構文

（99）nay-***ka*** yocum, maum-***i*** mwuchek *koylop-ta.*
私－主格　この頃　心－主格　とても　辛い－断定　‘私は最近, とても心が辛い。’

（100）na-***nun*** Chelswu-***ka*** nemwu {*coh/ silh/ kulip*}*-ta.*
私－主題　チョルス－主格　あまりにも　{ 好きだ / 嫌いだ / 恋しい }－断定
‘私はチョルスがあまりにも { 好きだ / 嫌いだ / 恋しい }。’

B．自他両用動詞の場合：二重主格構文

（101）a. Chelswu-*ka*, tali-*lul* *tachi-ess-ta.*（身体部分 : 非意図的事象）
チョルス－主格　足－対格　怪我する－過去－断定　‘チョルスは, 足を怪我した。’

b. Chelswu-***ka***, tali-***ka*** *tachi-ess-ta.*
チョルス－主格　足－対格　怪我する－過去－断定　‘チョルスは, 足が怪我した。’

（102）a. Yengi-*ka*, kapcaki nwun-*ul* *panccakkeli-ess-ta.*（身体部分）
ヨンイ－主格　急に　目－対格　輝く－過去－断定　‘ヨンイは, 急に目を輝かせた。’

b. Yengi-***ka***, kapcaki nwun-***i*** *panccakkeli-ess-ta.*
ヨンイ－主格　急に　目－主格　輝く－過去－断定　‘ヨンイは, 急に目が輝いた。’

（103）a. Yengi-*ka*, palam-ey chima-*lul* *phellekkeli-mye* kel-e-ka-n-ta.（延長）
ヨンイ－主格 風－位格 スカート－対格 翻る－現在－ながら 歩く－行く－現在－断定
‘ヨンイは, 風に（履いている）カートを翻しながら歩いていく。’

b. Yengi-***ka***, palam-ey chima-***ka*** *phellekkeli-n-ta.*
ヨンイ－主格 風－位格 スカート－主格 翻る－現在－断定
‘ヨンイは,（履いている）スカートが風に翻る。’

C．移動動詞の場合：二重対格構文

（104）a. Chelswu-ka mikwuk-*ey* yuhak-*ul* *ka-ss-ta.*（目的地と目的）
チョルス－主格 米国－位格 留学－対格 行く－過去－断定
‘チョルスがアメリカに留学に行った。’

b. Chelswu-ka mikwuk-***ul*** yuhak-***ul*** *ka-ss-ta.*
チョルス－主格 米国－対格 留学－対格 行く－過去－断定
‘チョルスがアメリカに留学に行った。’

c. Chelswu-ka mikwuk yuhak-*ul* *ka-ss-ta.*（目的地と目的の複合）
チョルス－主格 米国留学－対格 行く－過去－断定
直訳：‘チョルスがアメリカ留学を行った。’

d. *Chelswu-ka mikwuk-*ul* yuhak-*ey* *ka-ss-ta.*
チョルス－主格 米国－対格 留学－位格 行く－過去－断定
直訳：‘チョルスがアメリカを留学に行った。’

（105）a. Chelswu-ka sankil-*ul* {20 yepwun/ 10 li cengto} *kel-ess-ta.*（経路と外延量）
チョルス－主格 山道－対格 {20分あまり/10里ほど} 行く－過去－断定
‘チョルスは山道を｛20分あまり / 10里ほど｝歩いた。’

b. Chelswu-ka sankil-***ul*** {20 yepwun/ 10 li cengto}-***lul*** *kel-ess-ta.*
チョルス－主格 山道－対格 {20分あまり/10里ほど}－対格 行く－過去－断定
‘チョルスは山道を｛20分あまり / 10里ほど｝歩いた。’

c. Chelswu-ka {sankil 20 yepwun/ sankil 10 li cengto}-*lul* *kel-ess-ta.*
チョルス－主格 {山道20分あまり / 山道10里ほど}－対格 行く－過去－断定
直訳：‘チョルスは｛山道20分あまり / 山道10里ほど｝を歩いた。’
（経路と外延量の複合）

（106）a. Chelswu-ka wuntongcang-*ul* 10 pakhwuy *tali-ess-ta.*（経路と外延量）
チョルス－主格 運動場－対格 10周 走る－過去－断定
‘チョルスが運動場を10周走った。’

b. Chelswu-ka　wuntongcang-***ul***　10 pakhwuy-***lul***　*talli-ess-ta.*
チョルス－主格　運動場－対格　10周－対格　走る－過去－断定
‘チョルスが運動場を10周走った。’

c. Chelswu-ka　wuntongcang　10 pakhwuy-*lul*　*talli-ess-ta.*
チョルス－主格　運動場　10周－対格　走る－過去－断定
直訳：‘チョルスが運動場10周を走った。’（経路と外延量の複合）

D．行為動詞の場合：二重対格構文

（107）a. Chelswu-ka　pap-*ul*　3 kulus　*mek-ess-ta.*（対象と外延量）
チョルス－主格　ご飯－対格　三杯　食べる－過去－断定
‘チョルスがご飯を三杯食べた。’

b. Chelswu-ka　pap-***ul***　3 kulus-***ul***　*mek-ess-ta.*
チョルス－主格　ご飯－対格　三杯　食べる－過去－断定
‘チョルスがご飯を三杯食べた。’

c. Chelswu-ka　pap 3 kulus-*ul*　*mek-ess-ta.*（対象と外延量の複合）
チョルス－主格　ご飯三杯－対格　食べる－過去－断定
直訳：‘チョルスがご飯三杯を食べた。’

（104-107）の（b）と（c）に見られるように, 二重対格構文が許されると, 目的地と目的の複合, 経路と外延量の複合, 対象と外延量の複合も規則的に許容されることがわかる。

4.5 脱焦点化された動作主を含意する自動詞構文と他動詞構文

事態構造では動作主の関与が不可欠にもかかわらず, 言語的コード化においては他動詞表現よりも自動詞表現の方が好まれる場合がある。例えば,「最近急にマンションがたくさん建ちましたね」とか, 母親が一生懸命ご飯を作っているのを見ながらも「もうご飯できた？」というような例である。他にも, 一生懸命何かを探していて「やっと見つかった」という場合や, 球団と粘り強く交渉した後「やっと年俸が決まった」「やっと決着が付いた」などという場合もそのような例である。このような状況に対して寺村（1976: 213-214）は, 日英対照の観点から, 英語は「する」的表現（他動詞表現または受身表現）を好むが, 日本語は「なる」的表現（自動詞表現）を好む傾向があると指摘しており, また国広（1974）やHinds（1986）は「状況中心」（日）対「人間中心」（英）という視点の相違として, これらの例を捉えている。さらに進んで, 池上（1981）とIkegami（1991）は言語の全体的な類型として「する」言語（DO-language：英）と「なる」言語（BECOME-language：日）があると

主張した。

ところが, もう少し視野を広げると, 実は他動詞構文の中にも実際の事態構造では動作主（＝被使役者）の関与が不可欠にもかかわらず, それを言語化しない場合がある。例えば,「秀吉が大阪城を建てた」や「美智子さんは最近新しいドレスを作った」のように, 実際は大阪城を建てた職人やドレスを作った仕立屋が存在するが, それは言語化されない場合である。この構文の成立について Ikemgami（1982 : 98 - 102）は, 次の二つの語用論的要素が関与していると指摘している。一つは, 当該事態の遂行において技術的な難しさがあること, もう一つは, 使役者のオーソリティーである。つまり, この構文の成立には動作主の技術的スキルが要求されることと, 当該事象が使役者の指示の下で行われることが要求されて, その結果, 究極的な責任は使役者側にあると仮定される。一方, 鄭（2006 , 2007）ではこれを「介在構文」と名づけ（佐藤2005も参照), なぜ言語化しない被使役者が勝手に読み込まれてしまうか, という観点から問題提起を行った。そこで, その背後には名詞句の意味解釈が関与していると主張し, 概念化レベルが異なる二つの機能モデル――個体モデルと社会モデル――を提案した（河上1996 : 56のメトニミー説も参照)。

ここで, 上の二つの現象に目を向けると,（ｉ）実際に存在する動作主を言語化しない, よって,（ii）言語表現（形式）は実際の事態構造（意味）より短くなっている, という共通点がある。本節では, この一見繋がりのないように見える二種類の構文が, 本稿の記述枠組みを用いて分析すると, 実はその背後には明らかな繋がりが見えてくるということを韓国語の例を通して見ていく。結論を先取りすると, そこには「存在物の基本的スキーマ」(図3参照）とともに, 述語として生成・出現を表す **BECOME タイプ**と創作物の作成を表す **MAKE タイプ**が典型的に関与していることが明らかになる。具体的な観察の前に, 関与するこの二つの述語タイプが表すスキーマを第2節から再掲載する。

（108）a. BECOME スキーマ：　$BECOME_1$：(BE *m* —) BECOME *y* (— BE *y, z*)

（自然発生による自然物の生成・出現）

$BECOME_2$：(MAKE ⇒) BECOME *y* (— BE *y, z*)

（創作活動による人工物の生成・出現）

b. MAKE スキーマ：　$MAKE_1$：ACT ON *x, m* — BECOME *y* — BE *y, z* — HAVE *x, y*

（創作物の作成$_1$：創作物が創作者に帰属する場合）

$MAKE_2$：　ACT ON *x, m* — BECOME *y* — BE *y, z*

（創作物の作成$_2$：創作物が創作者に帰属しない場合）

脱焦点化された動作主を含意する自動詞構文

まず, BECOME スキーマを見てみよう。すでに3.1節で述べたように, $BECOME_1$ と $BECOME_2$ に属する動詞は共通する。しかしながら, 対象となる存在物の種類は異なり, $BECOME_1$ は自然物, $BECOME_2$ は人工物の生成や出現を表すものである。この場合, この二つのスキーマの関係は, 次のように理解される。元来自然発生を表す $BECOME_1$ タイプの動詞が**自然物から人工物へ**とその適用がシフトすると, $BECOME_2$ が成立する（3.1節参照）。またこのシフトの際には「存在物の基本的スキーマ」が関与し, そこからその**人工物を生成・出現するように仕向けた動作主を含意**する自動詞構文が生まれる。

上を踏まえて, 次の例を見られたい。（109）のように自然物の生成・出現を表す自然的事象の文では, 脱焦点化された動作主は解釈されない。その一方で,（110）と（111）では脱焦点化の動作主の存在が暗黙に理解されている。（110）は人工物の生成・出現を表し,（111）は典型的な $BECOME_1$ タイプに属する動詞ではないが, 新製品の入荷によるものの出現や開始によるある事態の出現を表す。具体的には, 目の前に人工物または人が関与する事態, 即ち人為的事象が出現することを意味する。従って, このように「人工物または人為的事象の生成・出現」を問題にするときには, 脱焦点化された動作主が存在すると理解されるのである。

（109）a. kapcaki　elkwul-*ey*　yetulum-*i*　*saynki-ess-ta.*（自然物の生成・出現）
急に　顔－位格　ニキビ－主格　できる－過去－断定
‘急に顔にニキビができた。’

b. tutie　namwu-*ey*　sayssak-*i*　*na-ss-ta.*（自然物の生成・出現）
やっと　木－位格　新芽－主格　出る－過去－断定　‘やっと木に新芽が出た。’

（110）a. samak　wuy-*ey*　kapcaki　say　kenmwul-*i*　*syngki-ess-ta.*（人工物の生成・出現）
砂漠　上－位格　いきなり　新しい　建物－主格　生じる－過去－断定
‘砂漠の上にいきなり新しい建物ができた。’

b. i　pwukun-*ey*　say　kenmwul-*i*　manhi　*tul-e-se-ss-ta.*（人工物の生成・出現）
この　付近－位格　新しい　建物－主格　たくさん　入る－建つ－過去－断定
‘この付近に新しい建物がたくさん建った。’

c. tutie　kyellon-*i*　*na-ss-ta.*（人為的事象における結果物の生成・出現）
やっと　結論－主格　出る－過去－断定　‘やっと結論が出た’

（111）a. kakey-*ey*　say　phiano-*ka*　*tul-e-wa-ss-ta.*（入荷による人工物の出現）
店－位格　新しい　ピアノ－主格　入る－来る－過去－断定
‘店に新しいピアノが入った。’

b. hoyuy-*ka* mak *sicaktoy-ess-ta*. （開始による人為的事象の出現）
会議－主格 ただ今 始まる－過去－断定 ‘ただ今会議が始まった。’

脱焦点化された動作主（＝被使役者）を含意する他動詞構文（介在構文）

次に, MAKE スキーマを見てみよう。ここにおいても, 二つのスキーマの関係が介在構文の成立と深く関わってくる。例えば,「秀吉が大阪城を建てた」は $MAKE_1$ を, また「職人が大阪城を建てた」は $MAKE_2$ を基盤にしてそれぞれ成立するものと理解される。つまり, 前者は「秀吉が（職人に命じて）大阪城を建てた」という介在構文の解釈ができ, 使役者が直接手を下さなくてもその結果は自分自身に帰属するものであると理解される。一方, 後者は職人が直接手を下して大阪城を建てるが, その結果物は自分自身に帰属するものではない[31]。

韓国語の介在構文を見ると, 次の（112）は MAKE タイプに属する動詞が直接用いられ, 意味的にも創作物（人工物）の作成を表す。（113）では, MAKE タイプの動詞が直接用いられているわけではないが, 新しい髪型の作成や時計を修理して新しくする, という意味が読み取れる。そして, その結果も使役者に帰属するものであろう。その一方で,（114）は MAKE タイプの動詞でもなく, 作成の意味合いを読み取ることも疑わしくなるが, その結果事態は自分に帰属するものと理解されよう。

（112）a. Kim pwucang-un ipeney cip-ul saylo *ci-ess-ta.* （人工物の作成）
金 部長－主題 今回 家－対格 新しく 建てる－過去－断定。
‘金部長は今回新しく家を建てた。’（実際は職人が建てた）

b. Yengi-nun ipen chwusek-ey hanpok-ul hanpel saylo *ci-ess-ta.*
ヨンイ－主題 今回 中秋節－位格 韓服－対格 一着 新しく 作る－過去－断定
直訳：‘ヨンイは今回の中秋節に韓服を一着新しく作った。’
‘ヨンイは今回の中秋節に（仕立屋にオーダーして）韓服を一着新しく作ってもらった。’

c. kyocang sensayngnim-i hakkyo-ey theynisu khothu-lul saylo *mantul-ess-ta.*
校長 先生.尊敬－主格 学校－位格 テニスコート－対格 新しく 作る－過去－断定

31）典型的・規範的構文に用いられる場合の $MAKE_1$ スキーマは,「鳥が巣を作った」や「花子が詩を作った」のように, 普通は自分が作ったものが自分自身に帰属する場合をいう。しかし, 履歴のない個人名（個体モデル）としてでなく, このように秀吉という歴史的人物の社会名（社会モデル）として概念化されている場合は, 一つの構文に二つのスキーマの合体を許すと考えるべきであろう。よって, 意味解釈上 $MAKE_1$ と $MAKE_2$ の分化が起こっているのだろう。「個体モデル」と「社会モデル」については, 鄭（2006）を参照。

‘校長先生が学校にテニスコートを新しく作った。’（実際は人夫が作った）

（113）a. Yengi-nun　onul　saylo　*meli-lul*　*hay-ss-ta.*
ヨンイ－主題　今日　新しく　頭－対格　する－過去－断定
直訳：‘ヨンイは今日新しく髪をした。’
‘ヨンイは今日（美容室で）新しく髪型を作ってもらった。’

b. kocang　na-n　sikyey-lul　saylo　*kochi-ess-ta.*
故障　出る－過去・連体形　時計－対格　新しく　直す－過去－断定
直訳：‘故障した時計を新しく直した。’
‘故障した時計を（時計屋で）新しく修理してもらった。’

（114）a. Hithulle-ka　manh-un　yuthayin-ul　*cwuk-i-ess-ta.*
ヒトラー－主格　多い－現在・連体形　ユダヤ人－対格　死ぬ－使役－過去－断定
‘ヒトラーが多くのユダヤ人を殺した。’（実際は兵士が殺した）

b. sonnim-i　thayksi-lul　*se-ywu-ess-ta.*
客.尊敬－主格　タクシー－対格　立つ－使役－過去－断定
‘お客さんがタクシーを止めた。’（実際は運転手が止めた）

以上から, 典型的な介在構文は**二つの MAKE スキーマ**（$MAKE_1$ と $MAKE_2$）に動機付けられて成立することがわかる。また,「なる」言語の特徴とされる, 動作主を含意する自動詞構文の成立も MAKE スキーマを基盤にして生成・出現する $BECOME_2$ スキーマに依拠していることがわかる。

5. 結論

本稿では, プロトタイプ理論に基づく他動性の記述枠組みを提案し, そのケース・スタディーとして韓国語の他動性の内部構造を記述し, この枠組みの有効性を示した。本稿のアプローチから特に注目に値する成果は, 非規範的構文を成立させる述語タイプやそのスキーマが特定できた点である。

本稿の分析によれば, 韓国語の非規範的な他動詞構文は主として MAKE スキーマや HAVE スキーマに動機付けられて成立することが明らかになった。言い換えれば, この二つのスキーマが形式面においての他動詞構文を形作る鋳型であると考えられる。また, 非規範的な自動詞構文に関しても, GET を基盤にした（帰属を表す）BE_2 と BE_3 のスキーマが関与する場合は与格 - 主格構文や二重主格構文が成立し, MAKE を基盤にした（生成・出現を表す）$BECOME_2$ スキーマが関与する場合は, 動作主を含意する自動詞構文が形成される。従って,

本稿の分析から見ると,「なる」(BECOME) 言語とは自然現象を表す述語タイプの自然物から人工物へのシフトが多く見られる言語であると再定義できよう。

本稿で観察された非規範的構文の種類およびこれらの構文の成立を動機付けている主なスキーマは, 次のようにまとめられる。ivとvからはHAVEとBEの対応構造が, またviとviiからはMAKEとBECOMEの対応構造が確認されよう。

非規範的構文の種類およびこれらの構文の成立を動機付けている主なスキーマ

i.	非意図的事象の他動詞構文 :	HAVE スキーマ
ii.	無生物主語の他動詞構文 :	$HAVE_4$ スキーマ, および $MAKE_1$ と $HAVE_4$ の合体スキーマ
iii.	同族目的語構文・軽動詞構文 :	$MAKE_1$ スキーマ
iv.	与格 – 主格構文・二重主格構文 :	GET を基盤にした BE3, BE_4 スキーマ, および BE_5 スキーマ
v.	二重対格構文 :	GIVE を基盤にした $HAVE_2$, $HAVE_3$ スキーマ $HAVE_4$ を基盤にした $ACT\ ON_1$ スキーマ
vi.	動作主を含意する自動詞構文 :	MAKE を基盤にした $BECOME_2$
vii.	介在構文 :	$MAKE_1$ と $MAKE_2$ の合体スキーマ

参考文献

Austin, J. L.(1961) The Meaning of a Word' in J. L. Austin, *Philosophical Papers*, London: Oxford University Press(2nd edn 1970).

崔鉉培 (1994 [1929])『우리말본』(我が言葉の語法) ソウル : 正音文化社 .

鄭聖汝 (1999)『他動性と態 (ヴォイス): 意味的他動性と統語的自他の韓日比較研究』博士論文 . 神戸大学 .

鄭聖汝 (2005)「규범적 사동구문과 비규범적 사동구문」(規範的使動構文と非規範的使役構文)『語学研究』41-1. pp.49-78. ソウル大学校言語教育院 .

鄭聖汝 (2006)『韓日使役構文の機能的類型論研究 : 動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ』東京 : くろしお出版 .

鄭聖汝 (2007)「大阪城は誰が建てたか ? ――使役連続性を超えて : 日韓対照の観点から――」『神戸言語学論叢 : 西光義弘教授還暦記念号』5. pp.21-33. 神戸大学文学部言語学研究室 .

鄭聖汝 (2008a)「使役と受身の曖昧性はどこからくるか ? : 韓国語の動詞接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能を求めて」『大阪大学大学院文学研究科紀要』48. pp.97-166. 大阪大学 .

鄭聖汝 (2008b)「비의도적 사태의 타동사구문에 대하여――한국어와 일본어의 관점에서――(非意図的

事態の他動詞構文について――韓国語と日本語の観点から――）財団法人韓国言語学会2008年冬季学術大会資料集 . pp. 129 - 141 .

鄭聖汝（2009）「非意図的事象と他動詞構文――『所有』か『責任』か , それとも？――」『日本語文法』9 - 2 . pp. 53 - 69 .

Dixon, M. W.（1971）A Method of Semantic Description. in Steinberg and Jacovits（eds.）（1971）*Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore Charles J.（2003 [1968]）*Form and Meaning in Language: vol.1 Papers on Semantic Roles*. CSLI.

Fromm, Erich（1976）*To Have or To Be ?* Japan UNI Agency: Tokyo. [佐野哲郎（訳）（1977）『生きるということ』東京 : 紀伊国屋書店 .]

Givón, Talmy（1984）*Syntax: A Funtional typological introduction.* Vol. 1 . John Benjamins.

Goldberg, Adele E.（1995）*Constructions: a Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. [河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子（訳）（2001）『構文文法論 : 英語構文への認知的アプローチ』東京 : 研究社出版]

韓송화（2000）『現代 国語 自動詞 研究』延世大学校言語情報開発研究院 . ソウル : 韓国文化社 .

Hinds, John（1986）*Situation vs. Person focus*. 東京 : くろしお出版 .

洪思満（2001）「중세・근대국어 어휘의미 연구（8）:『짓다』,『맹글다』의 의미분석」（中世・近代国語の語彙意味研究（8）: *cista/mayngkulta* の意味分析）『言語科学研究』19 . pp. 339 - 374 . 大邱 : 言語科学会 .

洪재성（1988）「현대 한국어 사전과 자동사・타동사 용법의 구분」（現代韓国語の辞書と自動詞・他動詞の用法区別）, 延世大学校言語情報開発院 . pp. 35 - 64 .

洪재성（1990）「한국어 자동사・타동사 구문의 구별과 사전 : 이른바 동족목적보어 구문의 경우」（韓国語の自動詞・他動詞構文の区別と辞書 : いわゆる同族目的語構文の場合）延世大学校言語情報開発院 . pp. 118 - 172 .

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson（1980）Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56 . pp. 251 - 299 .

深見兼孝（1997）「日本語と朝鮮語の「非意図的他動詞文」について」『日本語と外国語との対照研究Ⅳ : 日本語と朝鮮語下巻』pp. 213 - 226 . 国立国語研究所.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』東京 : 大修館書店 .

Ikegami, Yoshihiko（1982）Indirect Causation and De-agentivization: The Semantics of Involvement in English and Japanese. *Proceedings of the Department of Foreign Languages and Liturature*, *College of Arts and Science* 29 - 3 . pp. 95 - 112 . Tokyo: University of Tokyo.

Ikegami, Yoshihiko（1991）“DO-language” and “BECOME-language” : Two Contrasting Types of Language Representations. Yoshihiko Ikegami（ed.）*The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese*. pp. 285 - 326 . Tokyo: Kuroshio Publishiers.

任洪彬（1972）「国語税 主題化研究」（国語の主題化研究）『国語研究』28. ソウル : ソウル大学 .

任洪彬（1974）「主格重出을 찾아서」（主格重出を求めて）『文法研究』1. pp. 111 - 148. ソウル : 塔出版社 .

任洪彬（編著）（1993）『뉘앙스 풀이를 겸한 우리말 사전』（ニュアンスの解説を兼ねた国語辞典）Seoul: Academy House.

ヤコブセン , ウェスリー . M.（1989）「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』pp. 213 - 248. 東京 : くろしお出版 .

Jayaseelan, K. A.（1988）Compex Predicates and θ-Theory. *Syntax and Semantics* 21. pp. 91 - 111. Academic Press.

Jespesen, Otto（1949）*A Morden English Grammar on Historical Principles* vol. 3. London: George Allen and Unwin Lit.

影山太郎（2003）「身体属性を表す軽動詞構文と意味編入」『人文論究』53 - 1. pp. 74 - 87. 関西学院大学 .

影山太郎（2004）「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4 - 2. pp. 22 - 37.

河上誓作（1996）「『言語使用の創造的側面』と言語理論」『月刊言語』24 - 4. pp. 52 - 59.

金성화（1994）「동사유의어의 연구（2）: '짓다 / 만들다'」（動詞類義語の研究 : '*cista/ mantult*a'）『語文学』55. pp. 125 - 146. 韓国語文学会 .

国廣哲彌（1974）「人間中心と状況中心 : 日英語表現構造の比較」『英語青年』2 月号 . pp. 688 - 690.

Lakoff, George（1977）Linguistic Gestalts. *CLS* 13. pp. 236 - 287.

Langacker, Ronald W.（2000）A Dynamic Usage-Based Model. In M. Barlow and S. Kemmar（eds.）*Usage-Based Models of Language*. pp. 1 - 63. Stanford: CLSI Publications.（坪井栄次郎（訳）（2000）「動的使用依拠モデル」『認知言語学の発展』pp. 61 - 143. 東京 : ひつじ書房 .

Lee, Chung-Min（1974）*Abstract Syntax and Korean with Reference to English*. Seoul: Pemhansecek.

Lee, Kee-Dong（1993）*A Korean Grammar: on Semantic-Pragmatic Principles.*Seoul: 韓国文化社 .

Lyons, John（1977）*Semantics* 1. Cambridge: Cambridge University Press.

Næss, Åshild（2007）*Prototypical Transitivity.* Amsterdam/Philadelpia: John Benjamins.

Nishimitsu, Yoshihiro（2002）Transitivity Continuum. In Yoshihiro Nishimitsu（ed.）*Methods for Investigating Endangered Languages*（Endangered Languages of the Pacific Rim Project Report）. pp. 15 - 38. Kobe: Kobe University.

野間秀樹（2007）「動詞をめぐって」野間秀樹（編著）『韓国語教育論講座 1』pp. 489 - 520. 東京 : くろしお出版 .

朴형익（1989）「동사 '주다' 의 세가지 용법」（動詞 '*cwut*a' の三つの用法）*Hangul* 302. pp. 145 - 163. Hangul 学会 .

Pardeshi Prashant（2002）"Responsible" Japanese vs. "Intentional" Indic: A Cognitive Contrast of Non-intentional Events. *Japanese Language Education around the Globe* 12. pp. 113 - 144. Urawa: The Japan Foundation

Japanese Language Institute.

パルデシ , プラシャント（2007）「『他動性』の解剖 :『意図性』と『受影性』」を超えて」角田三枝他（編）『他動性の通言語的研究』pp. 179 - 190 . 東京 : くろしお出版 .

Pulman, S. G.（1983）*Word Meaning and Belief*. London: Croom Helm.

Pustejovsky, James（1995）*The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Quirk R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik（1985）*A Compehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Rosch, Eleanor and Carolyn Mervis（1975）Family Resemblances: Studies in the Internal Structure of Categories. *Cognitive Psychology* 7 . pp. 573 - 605 .

サルトル , ジャン＝ポール（著）・松浪信三郎（訳）（1960）『サルトル全集：存在と無―現象学的存在論の試み（第三分冊）』東京 : 人文書院 .

佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』東京 : 笠間書院 .

Taylor, John R.（2003）*Linguistic Categorization. Third edition.* London: Oxford University Press.

寺村秀夫（1976）「『なる』表現と『する』表現 : 日英『態』表現の比較」『日本語と日本語教育』pp. 49 - 68 . 国立国語研究所 .（『寺村秀雄論文集 2 : 言語学・日本語教育編』（1993）東京 : くろしお出版 . に再録）

辻幸夫（訳）（1996）『認知言語学のための 14 章』東京 : 紀伊国屋書店 .

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』東京 : くろしお出版 .

Tsunoda, Tasaku（1999）Transitivity and Intransitivity. *Journal of Asian and African Studies* 57 . pp. 1 - 9 . Tokyo: ILCAA. Tokyo University of Foreign Studies.

角田三枝・佐々木冠・塩谷享（編）（2007）『他動性の通言語的研究』東京 : くろしお出版 .

禹형식（1996）『国語他動構文研究』ソウル：Pakiceng.

Yang, In-seok（1972）*Korean Syntax* , Seoul: 百合出版社 .

吉成祐子・パルデシ , プラシャント・鄭聖汝（2007）「非意図的な出来事における他動詞使用と「責任」意識――日・韓語の対照を通じて――」『日本言語学会第 135 回大会予稿集』pp. 46 - 51 .

吉成祐子・パルデシ , プラシャント・鄭聖汝（2010）「非意図的な出来事における他動詞使用と「責任」意識 : 日・韓・マラーティー語の対照を通じて」岸本秀樹（編）『ことばの対照』pp. 175 - 189 東京 : くろしお出版 .

付記

本稿は , 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 21520400）研究課題「アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究」の一部である。

Transitivity in Korean

: Internal Structure of the Category from the Viewpoint of Prototype Theory and Non-canonical Constructions

Sung Yeo CHUNG

Abstract

The objectives of this paper can be summarized as follows: (i) to propose a framework for the description of transitivity based on Prototype Theory, (ii) to use this framework to describe Korean transitivity in its entirety, thereby showing the effectiveness of the framework, and, finally, (iii) to demonstrate the internal structure of various categories of transitivity and especially to identify predicate types (and their schemas) that motivate non-canonical constructions.

Unlike previous studies where transitive and intransitive clauses were each separately the subjects of consideration, this study proposes to introduce a Prototype based on the concept of family resemblance developed by Rosch and Mervis (1975). This approach has a conceptual parallel in the method of "Nominal categorization": We identify basic level categories and then introduce higher level categories of predicate types (MAKE, CAUSE, GIVE/GET, HAVE, ACT/ACT ON, MOVE, BECOME, BE. cf. Pulman 1983, Taylor 2003), and propose schemas for each of these predicate types.

Through this approach, it becomes evident that the formation of non-canonical transitive constructions (i.e. transitive constructions of non-intentional events, transitive constructions with inanimate subject, double object constructions, cognate object constructions, light verb constructions, etc) in Korean involves mainly two kinds of schemas: those of MAKE and HAVE.

Key words : transitivity, prototype theory, category, internal structure, predicate type, schema, non-canonical constructions, framework for description, Korean